ぶどうの木

第 8 号

目　次

巻頭言	榎本牧師	1
雑想	小羊生	2
みことばと感謝（その1）	伊規須太郎	4
〃（その2）	〃	10
わがたましいよ主をほめよ	竹末すが	13
あなたこそ私の主	正野員子	16
思い出すままに	安部タマエ	20
ぶどうの木雅歌	X Y Z	22
ひよこの一歩	安東篤良	30
文芸コーナー	A ＋ B	34
主の前に受け入れられるように	調悠子	35
エベネゼル	伊規須太郎	37
こうして彼は眠りについた	吉田志津枝	47
うべ我よきゆずりを得たるかな(4)	伊規須泰子	53
牧師館訪問記	取材班	56
ケンちやん	正野員子	68
いよいよ三級だ	野口加代	77
自己紹介	小田善昭	78
犬も食わないなんとやら	正野真宏	81
編集後記	安東倫子	86

八幡前田教会
大濠公園教会

巻頭言

榎本利三郎

神をおそれ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。（伝道の書12の13）

今日文明国といわれて居る世界の国々も、中世紀までは貴族・地主・役人等小数者の専制の下に、一般民衆は安全の保障が無く、存在さえも無視された暗黒時代でした。

ルネッサンスによつて科学が興り、宗教改革が行われ、古き専制時代が終り、個人に目覚め、自由と人権の尊重が叫ばれ、個人主義・民主主義が長足に発達し今日の科学文明が築かれて参りました。勿論個人が他の何物にも替え難い存在であると人権を尊重する事は人類の大きな成長でありました。然しそのために人本主義と成り、神を無視し、神を恐れず、たゞ人間を中心とし、科学的な人間観・世界観・価値観となり、人間生活の総ての面で人間の霊と心は荒廃して恐怖におののく現状となつたのではないでしようか？　詩篇106篇15節にこの姿が記されて居ります。

主は彼らにその求めるものを与えられたが、彼らのうちに病気を送つて、やせ衰えさせられた。

その結果キリストの身体なる教会にまで人本主義が浸透して、主を中心と称して居りますが、実際は人間中心となり、人の意見と計画に依つて働いて居ます。

私共も長年、教団の中に在つて、主を中心とした信仰になつて欲しいとの祈りと願をもつて参りました。然し近年教区・地区が教会性を強化して参りまして、私共の信仰を持つて留まる事ができなくなりました。

それで四月から教団を離れ、主から与えられた使命に邁進することになりました。神を恐れず、敬うことを忘れた現代に在つて、生活のすべての面で、神をおそれ、その命令にお従いして参り度く願います。　完

雑想

小羊生

素人に菊造りは無理な事は良く知つていたが、領けて貰つた苗を、育てゝみようと思つて始めた。自信も経験も全然ないけれど、人から聞いた事をたよりに、腐葉土を造り鉢造りをやつた。菊苗は声を出して語る事はしないが、水が枯れるとその葉は打萎れて、私に「渇きを止めてよ。」と求めている。肥料が切れると栄養失調の淋しい哀れな葉の色をして私に哀願する。私は無言の祈りに答えて肥料を与えてやる。すると漸して元気を回復して、色艶の良い姿ですくすくと伸びて来る。支柱を立てゝ丈夫に結びつけてやると、真夏も終る頃には背丈も大きく幹も丈夫で落くばかりに成長して私に希望を与える。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。然し成長させて下さるのは、神である。だから植える者も水注ぐ者も、共に取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。」

（Ⅰコリント三〇六―七）

水は絶対に毎日十分に与えねばならぬ。その管理と世話は欠くべからず。少しずつ朝夕涼しくなり出した頃に、ふと頭部の葉先に小さいこぶがつく。「ヤア蕾がついたぞ。」苦労もきつい管理も何のその、いよいよ楽しいものになる。さわやかな秋風が鉢の菊をすぎて行く時、今この小さな蕾がやがて奇麗な花を着けて、淋しい庭先に、かざりを添えて呉れる事と、望みも確実になつて来る。「さて信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認する事である。」昔の人はこの信仰の故に賞賛された。

（ヘブル十一〇一―二）

ところが大敵あらわる。つい油断していた間に、油虫が葉の裏についていた。あわてて、消毒液が足りない事を知つた。一日怠ると、もう虫は茎にまで若芽の先まで、果ては蕾のそばまで、遠慮なく、どまをふつた様に着いて終うのである。消毒薬の散布や、出来る所は手でも取り退く。中々大変なことである。誠に油断は大敵であると知つた。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回つている。この悪魔にむかい、信仰に堅く立つて抵抗し

なさい。」

（Ⅰペテロ五・八）

さてその頃蕾が太つてくる頃、大事な仕事がもう一つ、茎と葉のわきから芽が出るので、ピンセットでたえず摘み切つて取つて終うことである。そうしないと上の花の方に、力が行かないからと教わつて、たんねんに摘みとる。蕾がいくつもつけば、皆咲かせたいと思うのが誰もである。之も惜しむ事なく、どんどん摘む。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながつている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もつと豊かに実らせるために、手入れをしてこれをきれいになさせるのである。」

（ヨハネ十五〇二）

小指先位の蕾が親指の先程に、段々こぶし位に開いてくる。完成も近い。花台をつけてやると、すつかり見事な花弁の重さを静かにのせて、何とも色も香もすばらしして、眺める者を慰め楽しませて呉れる。そして語らず言わず神の栄光をあらわし、讃美している。

「あなたがたは、代価を払つて買いとられたのだ。それだから、自分の体をもつて、神の栄光をあらわしなさい。」

（Ⅰコリント七〇二十）

「・・・規定に従つて競技をしなければ、栄冠は得られない。労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配物に与るべきである。」

（Ⅱテモテ二〇五ー六）

まねごとながら一輪の菊を造りあげて、色々教えられることばかりであつた。我々も造主に喜んで頂ける様な花を咲かせて頂きたいものと、心から祈り願うのである。

× × × ×

わが家の前に、玄関を上ろうとすると、石垣の間のホンの一隅に、余り土もないような所に、狭い花壇からこぼれて生えているのは〝すみれ〟である。去年の春から根をおろして、わざわざ石垣の間に、育つたのである。そこで夏は植木鉢に水をやる時、渇いたすみれにも、たつぷり飲ませていた。ふと十二月の終りに、外出から帰つて目についたのは、紫色のかわいゝ花をつけて、「見て下さい」とばかりに、葉の下から覗い

ている。寒い北風に吹きつけられ、霰のつぶてに打たれ乍ら、戦いもものかは、力一杯、元気良く咲いていたのには全く驚いた。凡そ春の花であるこのすみれが、生命あるものの強さと言うか、余りの力強さに、素晴らしいものを感じた。それは弱い自分を励まして呉れているのだ。

少々の戦いや困難で簡単につぶれ倒れるようでは、草花よりも劣るではないか。負けてなるものか!!そしてこの小さい花すみれは、色も美しいが、その香りは又何とも言えないものである。そこらの香水の比ではない。豊かな神の恵は小さい草花にまで、かくも溢れるばかりである。あゝ、これ等は如何にして育つかを思えと、汝らはこれらよりも勝れるものならずやと、主の垂訓を深く思わせられた。いと小さい者乍ら我らも、この小さい草花のように、美しい色と香りを放ちゆく者でありたいと心から願うものである。

余りに奇麗ですばらしかつたので、先日、アメリカに居られるHさんに送るカードの中にそつと封じこめて、日本の香りを送ることにした。

栄光神にあれ!!

完

みことばと感謝

伊規須太郎

その一

「・・・・これらのものはみな異邦人が切に求めているものである。・・・・まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」

世の中に思い煩らいと不安が満ちているのに、すべてから解放し、自由と勝利を与えて下さる神様のすばらしさ！一日一日を精一杯生きる平安！

「あなたがたはこの世ではなやみがある。しかし勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」

どんな擬装していてもサタン（世）は私に敵対するものだ。戦いがあることは私が神の子であることを裏付けるものではないたろうか。しかしこの戦いでは主が先頭に立つて下さるから感謝。

（讃美歌四四五

かちはなが手にあればゆけやゆけ）

「私によく聞き従え、そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で、自分を楽しませることができる。耳を傾け、私にきて聞け、そうすればあなたがたは生きることができる」

結局、人は一人一人が神様の細い御声に従うことだ、それ以外に生きる道はない。細い声に耳を傾ける訓練をしよう。なやみによつて私の耳を開いて下さる神様をほめたたえる。

「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いつさい神にゆだねるが

人間どうしで「私にまかせよ」と言おうとすればこれは大変なことだとわかる。「いつさいをまかせよ」と言われる神様は何と偉大な方であろうか。このかたが私にあるのだから物おじすまい。何事にも挑戦しよう。飢よ来れ、裸よ来れ。

「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」

ふりかえつても、望み見ても、ただ感謝と讃美のみ。震われない国の尊とさを何にくらべられようか、感謝しつゝ、おそれかしこみ、神様に喜ばれるように仕えて行こう。

〃キリストにはかえられません、世の何物も〃

「神のみ名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな、知恵と権能とは神のものである」

生命科学の進歩は人間の遺伝情報を操作して、好むところの人間を作り出すことができるであろうと。しかし神様のみが知恵と権能の持ち主であり、バベルの塔を崩し「近付くものは打ち殺される」

「神は侮られるような方ではない」と言われる。科学は神様の前にもつと謙遜にならねば恐ろしい結果を招くのではないだろうか。しかし私は祈ることができるから感謝。

「あなたのすることはすべて、言葉によるとわざによるとを問わず、いつさい主イエスの名によつてなし、彼によつて父なる神に感謝しなさい」

主の名によつてできることとか、父なる神に感謝できることとか、これらは私の日常生活に対する最もよいものさし。

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」

「あなたが立つているその場所は聖なる地である」と言われるのに私は何と愚か者だろう、ほかの状態、ほかの時間、ほかの所を考える。しかし今、この所、この状態の中が教材の満ちた最も良い学校と知つて感謝する。

「『エレミヤよ、あなたは何を見るか』わたしは答えた、『あめんどうの枝を見ます』主はわたしに言われた『あなたの見たとおりだ。わたしは自分の言葉を行おうとして見張つているのだ』」

エレミヤが目をこらして見つめている姿が見えるようだ。神様は絶えず真理を示し私共を引上げ、整えようとして下さるから感謝。常に目を開いて頂くよう祈り、そして見つめよう。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ」

神様の懇命の呼びかけ。しかも「あなた」と私個人に語つて下さるとは何と驚くべきことだろうか。神様の御前に奥深く進んで行くと、なかなかデリケートになつて来る。しかし立帰ればすぐ恐れを取り去つて下さるから感謝だ。

「・・・・無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ・。」

押し詰らない前に、まだ自由度のあるあいだに、ねんごろにすゝめて下さる神様の恵を感謝する。

人生は常に選択だから。

「私たちの推薦状はあなたがたなのである。それは私たちの心にしるされていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。そして、あなたがたは自分自身が、私たちから送られたキリストの手紙であつて、墨によらず生ける神の霊によつて書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はつきりとあらわしている」

私のような者を、知られる者、読まれる者として下さることを感謝します。私の中には何も無い、ただ神様を仰ぎ望みつゝ走る姿勢があるのみ。誰かがこの姿勢を見ているかも知れない。神様のつきぬ恵はこゝに注がれる。万物は神より出で神によりて成り神に帰す、栄光とこしえに神にあれ。

「私はノアの洪水を再び地にあふれさせないと誓つた

が、そのように、私は再びあなたを怒らない、再びあなたを責めないと誓つた。山は移り丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない」

私は真実でなくても、主は真実に約束して下さるから感謝。世の中の依り所は、すべて消え失せる時が来るが、私にはこの不動の岩があるから感謝だ。「あなたは私の主、あなたのほかに私の幸はない」と私は主に言おう。

「あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう」

私に何かが出来るように感ちがいしやすいが、私のなすべきことは万物を支配される神の手の下に己を低くし、その持場で力をつくす事だ。あとは、事を行ない、事をなし、事を遂げる方が御旨を行なつて栄光を表わして下さるから感謝。神様は私のために、力をつくし、お一人子を傾けつくして下さつた。私もこの方の前に力をつくそう、つくす所に次々と満たして下さるから感謝。

「求めよ、そうすれば与えられるであろう。・・・・・すべて求める者は得・・・・」

神様の無条件の御約束に感謝する。激しく攻める者は天国を奪うとあり、ソロモンは知恵を求め、エステルは民の命を求めた。私は先ず神の国と神の義を求めよう。

「あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである」

私は聖書の読みつばなし、祈りつばなしをしやすいが、神様はこんな私に絶えざる交わりを求め、あふれる喜びを満たして下さるから感謝だ。読んで受取つたら祈ろう、祈つたら耳を傾けよう、そして又。。・・・。こうして光の中を歩み続けよう。

「・・・・それゆえ、私は望をいだく。主のいつくしみは絶えることがなく、このあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい」

人は深い渕の中で人生の岐路に立つのではなかろうか。エレミヤは主のいつくしみとあわれみによつて望を持つた。柘植先生は恵の法廷で赤子になつて神様のあわれみに縋つた。イエス様から「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり」と言われた中風の人は、起き上つて家に帰つた。神様は今も「子よ心安かれ」「わが若子よ」と呼びかけて下さる、子なら、赤子ならどんな所からでも神様のふところにとびこめるから感謝。

「・・・・友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上つて必要なものを出してくれるであろう・・・・」

得るまで成るまで、しきりに求めるなら必ず与えて下さるから感謝。ヤコブの生涯、ことに神の使とのすもう、エリヤにどこまでも付き従つたエリシヤ、カナンの女、盲の乞食など多くの模範は私のためのものと感謝する

「良い忠実な僕よ、よくやつた。あなたはわずかなものに忠実であつたから、多くのものを管理させよう。主人といつしよに喜んでくれ」

五タラントの僕と二タラントの僕を同じ言葉をもつてほめ給うた神に感謝する。外の形（金額）でなく、各人の心を見られる神の前ならば、弱く小さく失敗だらけの私でも望が持てる。こちらも生涯を傾け、主から甦えりの恵を傾けて頂こう。

「私が床の上であなたを思いだし、夜のふけるまゝにあなたを深く思うとき、私の魂は髄とあぶらとをもつてもてなされるように飽き足り、私の口は喜びのくちびるをもつてあなたをほめたたえる」

いのちを狙われている中でただ神様のみを仰いだダビデの態度。神様のいつくしみ。私にも髄とあぶらの恵を飽かせ、深い深い交わりを体験させて下さることを感謝する。しかも神様はこの交わりを求めて居られる。「あなたの顔を見せなさい。あなたの声を聞かせなさい」と。

「死のとげは罪である。罪の力は律法である。しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによつて、わたしたちに勝利を賜わつたのである。だから愛する兄弟たちよ、堅く立つて動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい・・・・」

今すでに勝利を与えて下さつた神はかの日、一瞬にして私を変えて「死は勝利にのまれてしまつた」とのお言葉を成就し給う。驚くべき勝利!!尊い身分!!この方の前に全力を注いで励むとき、豊かに報いて次々と満たして下さるから感謝です。

「たとえたくさんの物を持つていても、人のいのちは持ち物にはよらないのである」

真の満足とは何か。パウロは「何も持たないようであるが、すべての物を持つている」「信心があつて足ることを知るのは大きな利得である」「私はどんな境遇にあつても、足ることを学んだ」と言う。真の満足は多くの物を手の中に持つことではなく、天に宝を積むことによつて与えられる。必要とあればかしこから一切のものを満たして下さるから感謝。

「悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う」

人はとかく神様を離れやすいが、こゝには道を潔めて頂く秘訣があるから感謝だ。常に主を思う思いは何と楽しみ深いものだろうか。神様もこのような交わりを求め、恵もうとして居られるのだから一層深く進んでいこう。

「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かつて心を全うする者のために力をあらわされる」

私に対して真実を傾けつくして下さつた主は、私に真実を求め求う。ヒゼキヤの涙を見て祈りに答え給うた主に対し、私も切に祈ろう。外の形でなく、心を見、真実を見て下さるから感謝だ。

「御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。そして御言を行う人になりなさい。おのれを欺いてただ聞くだけの者となつてはいけない。・・・・完全な

自由の律法を一心に見つめてたゆまない人は、聞いて忘れてしまう人ではなくて、実際に行う人である。こういう人は、その行いによつて祝福される」

一心に見つめてたゆまないとは、何という強い言葉だろうか。しかしその人こそが御言葉を行ない、歩む者であり、祝福を受ける者だと言われるから感謝だ。ペテロは嵐の湖上を歩いたが、私も一心に主の御言葉を見つめて、たゆまず進もう、これ以外に生きる道が無いからだ。

（以上一九七二・一〇まで）

みことばと感謝

その二

「彼らは大きな患難をとおつてきた人たちであつて、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである」

イスラエルの十四万四千人のほかに数えきれぬ多くの者が、天国の礼拝に加えて頂けるから感謝だ。

その条件は「大患難の中を通り、衣を小羊の血で白く洗うこと」とある。順調な人、出来上つた人とは書かれていない。主に香油を注いだマリヤのように、常に恵に感じてお仕えしよう。

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従つてきなさい」

何とかして主に従いたいと思うとき、主は二つの条件を示される。「良き己」でも己を捨てよう。あの恵の十字架を負い、仰ぐとき、何も言う事なし、たゞ感謝のみ。神様が御旨を行なつて下さるから感謝。「みふみの光は罪をあがなう十字架の上にぞみな集まれる」と歌おう。

「安かれ。父がわたしをおつかわしになつたように、わたしもまたあなたがたをつかわす」「わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものである。だから、へびのように賢く、はとのように素直であれ」

主に従うとき、患難が多い。しかし派遣者である

主は、力を与え、全責任をもつて導いて下さるから感謝。蛇の如く・・・・鳩の如く・・・・とあるが、主の御生涯がまさにその通りであつた、この人を見よとある。あらゆる意味で世に勝つ者となりたい。

「耳を傾け、私に来て開け。そうすれば、あなたがたは生きることができる」

神様を求め、神様に従う事を渇き求めるとき、「何をしたらよいか」と考えやすい。しかし、神様の求めは「来れ」であり「耳を傾け、私に来て開け」である。これならむつかしいことはない。しかも、人の熱心や計画によらず、真に生きることが出来るとある。ダビデは波乱に富んだ生涯を送つたが、神様は常にその中で確かな恵を与えられた。私も同じように聞き従おう、神様が全責任をもつて全うして下さるから感謝だ。

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てゝ主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」

神様は何とあわれみ深い方だろうか。二度、三度と悔い改めの機会を与えようと呼びかけて下さる。このチャンスは私にとつて再び与えられぬものかも知れない、呼びかけを大切に受けとめよう。聖霊に迫られたら、迅速に従い、神様にお委せしよう。白衣の群として天国の礼拝に加えて頂こう、神様がすべてを全うして下さるから感謝だ。

「イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々に譬で教えられた。・・・・不義な裁判官の言つていることを聞いたか。まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか」

暗い中で私はすぐ失望する。しかし、長い間そのまゝにしておかないとあるから感謝だ。朝の光は近い、得るまで成るまで祈り続けよう。五度も六度も、カナンの女のように、ダニエル（夢の秘密）

のように。

「この大軍のために恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。・・・・この戦いには、あなたがたは戦うに及ばない。・・・・あなたがたは進み出て立ち、あなたがたと共におられる主の勝利を見なさい」

真実に信頼したヨシャパテに対して神様もまた真実に答え給うた。私も神様を信頼して待ち望もう。この方が先頭に立つて戦い、私がただ恵にあずかることは実に恐れ多いことだが、神様が「戦うに及ばぬ、勝利を見よ」と言われるのだから安心であり感謝だ。

「たとえ、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従つてきなさい。

ペテロに対して格別に語りかけ、ねんごろにすゝめ給うた主は、今も私に呼びかけていらつしゃる。エリシヤのように、モーセのように、パウロのように、そのほか多くの聖徒たちのように、いさぎよくサッと従おう。踏み出そうとすると、すぐ喜びを満たして下さるから感謝だ。「残り無くみむねに、委せたる心に、えもいえずたえなる、まぼろしを見るかな・・・・」

「ああ、主なる神よ、どうぞ私を覚えて下さい。ああ神よ、どうぞもう一度、私を強くして、私の二つの目の一つのためにでもペリシテ人にあだを報いさせて下さい。・・・・私はペリシテ人と共に死のう」と言つて、力をこめて身をかがめると、家はその中に居た君たちと、すべての民の上に倒れた。こうしてサムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かつた。

生れながら神様に召されたサムソンが女性に弱かつた事は、世に深入りし易い我らに対する警告であろう。神様との契約を破り、目をえぐられ鎖につながれた彼の姿は真にみじめであるが、約束の髪の毛を再び伸ばして下さつた神様のあわれみは何と大きなものであろうか。命をかけて神様のあ

われみにすがつたサムソンの驚くべき悔改めの果を見て神様をあがめる。彼の生涯はすべて私の身にあてはまるものと思う、あわれみにすがり最後の力をつくそう。神様の栄光を望んで感謝する。

（一九七二・一二・二一まで）

わがたましいよ、主をほめよ

竹末すが

毎年のことですが、長男は彦島に住んでおりますから、暮の二十七・八日頃から一月十日前後までは帰っておりました。ところが大阪にいます三男が昨年暮帰り、私のいますせまい部室に一諸にいましたが静かで近くには次男もいます。「五日に集まりますのでよろしく」と、たよりを受取りました。昨年は長男の所へみんな集り健康を感謝しながら楽しいつどいを過しましたが今年は私の家です。

久し振りに三男と二人で静かな新年を感謝の内にお迎えし、二日には長男も次男も来て孫・甥と子供づれで、せまい室はいつぱい。思い出話もなつかしく、日の落ちる頃まで楽しみ、再会を約束して帰つていきました。

三男は弱くて入院したこともあり退院の時、頂きました聖書には、みことばが書いてありました。「苦しみにあつたことは良い事です。それによつて神のおきてを知ることができました。」時々聖書を読んで、神

を信じることによつて「力は神にあり」の聖書にはげまされて、お恵みの内に務めているとのこと感謝でした。その三男も四日夜には大阪へ帰りました。五日・六日とやつと静まり何年ぶりでしようか、七日からの聖会の為、祈つて待望んでいました。

新年の標語

「見よ、我万物を新にせん。」

「エホバを畏るる者よ、エホバに依頼め。エホバは彼ら助、かれらの盾なり。」

「信仰なくば神を喜ばすこと能わず。」

三つの聖句を頂き、聖会も一回ごとにお恵を受けまして冷え込む日も「来て、神のみわざを見よ。」との聖言にささえられて、九回とも出席出来た事は主のあわれみと感謝でした。

一月四日でしたが、妹の女学校時代のお友達が妹の三男に縁談を持つてきて下さり、見合をすすめられましたのが幸いにまとまつた様で、婚約式を先生にお願いいたしたいのでと頼みました。実は根本先生、奥様も妹は前から存じあげておりますけど日頃、教会にも出ませんので、「お願い出来るでしようか」と、申しあげにくいようでしだが先生は亡き母の熱心な信仰と（愚かな私は未だ信仰のはげみがなく、母が）九年前の最後の言葉に「みんな信仰に入つて下さい」と申しました事も先生はご存じで、「おばあちゃんの祈りが聞かれたのでしよう。」と喜んで下さり御多忙の中を御承諾下され、本当に嬉しくて感謝でいつぱいでございました。私は思つてもみなかつたことだけに驚きまして「見よ我万物を新にせん」の聖言により、主が選んで下さつた御縁と信じて、感謝せずにはいられませんでした。

五月十六日、火曜日午後、集会の後婚約式を上げて頂き、皆さんとお菓子とお茶を頂きながら皆さん　共共、喜んで下さり感謝でした。六月二日より松岡先生による聖会も前田教会の皆さんも御出席下さり「今はエホバのはたらきたもうべき時なり」「もし人が卑しいものを取去つて自分をきよめるなら彼は尊いきよめられた器となつて主人に役立つ者となり、すべてのよいわざに間に合うようになる」――聖言に信頼の出来る信仰にはげみたいと祈つて願つております。

七月に突然、夏風邪を初めてひき、最初から頭がい

たく、せきもでて三日間、臥ることが出来ず、ぐったりなつて大変苦しい体験をいたしました。丁度その時、教会のお友達の金生さんが尋ねて来て下さいました。一人で出かける体力に自信がないところでしたので、本当に嬉しく思いました。肩にすがり医者までつれていつて頂きましたが、医者も驚いた様子で、レントゲンをとり血圧も上が一一〇まで下り心配された様子でした。安静するようにいわれて帰る途中、小松さんにもお会して、お二人で送つて下さり、夕食の用意までして頂き申し訳なく思いました。次男の嫁が夕方、帰つて子供から聞き飛んで来た時は、もう落ちついたところでした。

セキがなかなかとまらず甥の結婚式が九月十七日なので、せめて式たけでも出られますようにと、せつに祈つていましたら十四日に二カ月も続いたセキがぴたりと止まり、あまりのことに驚き、急に元気が出てきました。

十七日の式は、晴の良いお天気に恵まれた、日曜日の礼拝後、一時より結婚式。二人の晴の姿を迎え、母に一目でも見せたいと胸がつまる思いでした。披露宴にも出席でき「すべてのこと相働きて益となる」の聖言どおりすつかり癒されまして感謝にたえませんでした。一昨年から腸が悪くて不自由でしたが永い間、安静ができて今は少しずつながらも食べる事ができるようになりました。

十月十九日、婦人会の一泊旅行〝南阿蘇〟の垂玉温泉に初めて皆さんについて行く健康を与えられました。すばらしい景色に驚き、御一緒に食事がいただけ、感謝でした。また早天の祈り会に出席させていただき、いい空気を胸一ぱいにうけ、主のお恵みを感謝しました。翌日はバスで熊本へ行き、水前寺公園・熊本城と戦後初めての楽しい思い出になりました。

今年もわずかで終りますが、この一年、さまざまな中を主の豊かなお恵みとあわれみによつて、常に盾となつてお守り下さいましたことは、ひとえに感謝でございます。

新年を迎えるにあたり、どんな聖言を頂きますか、祈つて待ち望んでいるのでございます。

終

あなたこそわたしの主

正野員子

一

「あなたは死にます。あなたは必らす死にます。これだけは自信をもつて保証します。」

牧師先生は同じことを何度も繰返し説教された。それを認めないわけではないが、健康な体ではなかなか実感として受取りにくいものである。受取りたくないものが働いて、自分の外におき、人事のように聞いていたようでした。

こんな鈍感な者には体得させるほかに仕方のないと思召めされたのか、早速実感させて下さつた。

めつたなことに風邪も引かない私が、風邪から肺炎を引起し、神ゆを願つて、医者にもかからずがんばつたが、熱はますます高くなり四〇度を越すと、胸がしめつけられる激痛に、呼吸困難を覚え、吸う息もはく息も一つ一つが命がけで、まかり間違えば息の根が止まるのではないかという不安と苦痛で耐えられなくなつた。

その時、「私は死ぬかも知れない」と思つた。物事の整頓も、心の準備もないことを知らされ、今更あわてて見てもどうにもならないみぢめな状態でした。こんな筈ではなかつた。私が死ぬときは、イエス様のように「神よわが魂をゆだねます」と従容と天国にたずさえ上げられるつもりでいたら飛んでもないことでした。今死んだら大変だという気持ちが先に立つて、「イエス様！助けて下さい！」と心の中で必死で叫んでいた。その叫びの中に、今度こそいつ召されてもよいように心の準備をして置こうと我が心に誓いながらあわれみを求めた。泣きながら祈つた主は、ダダツ子のような者の祈りにも耳を傾けられ、熱が下りそして楽になつた。

主の御名はほむべきかな、御名の故にあがないの御血によつて不信仰者の祈りをお聞き下さつた尊い体験をさせて下さつた。

このことを決してわすれず、いつも天国目ざして、準備して置こう。

さて、準備とは何ぞや

分けてやるべき財産はなし、私の死んだ時の葬儀の順

序やさんびかやみことばを選ぶことではなかろう。
そういうことは牧師にまかせておけばよいことである。
要するに人が天国に行つても自分がはいれなかつたら、何もならない。ひろみちゃんの昇天を思い出した。
ひろみちゃんは在生中、何の準備をしたか、人の世話になりつばなしであつた。しかし只イエス様を信じ、イエス様だけを見つめた時、信仰の如く主は来られた。その喜びの笑顔は今も忘れられない。
「イエスさまがきなさつたよ。おかあちゃん、もうついてこんでいゝさようなら」
ひろみはわずか四才であつたが持つているものは信仰だけであつた。そうだ信仰だけでいゝのだ。
「わたしたちも皆かつては彼らの中にいて、肉の慾に従つて日を過し、肉とその思との慾するままを行い、ほかの人々と同じく生れながらの怒りの子であつた。しかるにあわれみに富む神はわたしたちを愛して下さつたその大きな愛をもつて罪過によつて死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし―あなたがたの救われたのは恵みによるのである―キリストイエスにあつて共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さつたのである」（エペソ二・三）
主よ感謝致します。私はあなたの外に誰れを持ちましよう、あなたこそわたしの主です。

二

吉田先生の記念会を十二月七日にしますから正野さんお証して下さいという電話が奥様からかゝつたので、必らず参ります、と返事をした。私が行こうと思えば行かれると思つたからでした。所が思わぬ災難が起つて、行かれなくなろうとは・・・・・
記念会は午後だから、午前中に鶏糞をいたゞく為、リヤカー引いて鶏舎に出かけた。暗がりで土間が濡れてずるずるしているのに気付かず足をふみ込れた、トタンすべつて、たゝきの上に仰向けに、ひつくり返つた。そのショックは、丁度高いビルから落ちて、たゝきつけられたような衝動を受け、しばらくは物も言えず目も見えず、体は石像のように動かなかつた。有難いことに先づ祈りが最先で心に平安はあつた。人が馳けつけて来られて、起そうとされたが、しばらくこのまゝにしておいて下さいと頼んだ。誰方か気をきかせ

て下さつてトラックでねたまま運んで下さつた。公民館から主人を電話で呼んでいたゞき、帰えつてもらつた。記念会はその旨電報で欠席のお知らせをした。ほんとに申訳けないと思つた。この時つくづく主の許しなくば何事も出来ないことを悟つた。

当然出席出来ると思つて祈りもせず出掛けた「事毎に祈祈れ」とのみことばがひどく私の胸にこたえ、身をもつつて教えて下さつた。それからもう五十日も経つたが、体が、がたがたになつて体全体が痛んで何も仕事が出来ない。礼拝の椅子に腰をおろすのも苦痛であつた。医者に見せ、レントゲンを取り、薬も飲んだが中途でやめてしまつた、効果がなかつたからである。神癒で祈つていたゞいた時、「人にはなし能わざるところあり、されど神においてはしからず」というみことばをいたゞいた。次の週も又祈つていたゞくと、又同じみことばでした。ねてもさめてもこのみことばを心の中でくり返し祈つた。信仰を持つて、働いて見ようと思つて、茶腕を洗いかけたが、胸が痛くて思わず投出してしまう仕末でなさけなくなる。主人がやさしく「ねていなさい」と言つてくれるけど、そうそうねてもいられない。或る信者の方がおつしやるのに、肋間神経痛になつて一年で治ればいゝ方だと聞かされては、ますます心細くなつた。鞭打症と同じで、一生治らぬかも知れない等不信仰が頭をもたげたこれではならぬと信仰持とうと奮い立つようにして木曜会に出席した。

「主はわたしの義に従つてわたしに報いわたしの清きに従つてわたしにむくいかえされた。」

（詩・一八・二〇）

このみことばによつて強く自分の心の中の不信仰を示された。

「たとえあなたの罪は緋のようであつても雪のように白くなるのだ紅のように赤くても羊の毛のようになるのだ」

（イザヤ・一・一八）

主のあがないによつて、不義な者を義人として、下さつた奇蹟に思至つた時そうだ人にはなし能わぬところなりされど神に於てはしからずそうでしたこのように限りなく愛し恵んで下さつたことに思いが至つた時あがない主なるお方がどうして元通り健康を帰えして下さらないことがあろうか、と言う信仰がお腹の底から湧き出づる泉のように満され、思わず先生に感謝の祈

りを捧げていたゞいた。帰えりの身の軽るかつたこと、信仰とはこれだと思つた。

然し痛みがなくなつたわけではない。「アブラハムは百才となつて彼自信の体が死んだ状態でありまたサラの胎が不姙であるのを認めながらもなお彼の信仰は弱らなかつた。」（ロマ・四・一九）

私は神ゆを確信し、永い間畠の手入れを怠つていたので、鍬を取つて手入れした。重労働だがサンサンと輝く太陽を体一つぱい受けて喜びがあふれた。いやされていたからである。「彼はわれわれのとがのために傷つけられわれわれの不義のために砕かれたのだ。彼は自らこらしめを受けてわれわれに平安を与えその打たれた傷によつてわれわれは、いやされたのだ」（イザヤ・五三・五）

「神はそのひとり子を賜わつたほどにこの世を愛して下さつた。それはみ子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ・三・一六）

主は生きていられる。いやしき我をさ　愛し、いのちを給う。もはやわたしは恐れない、誰れが何と言おうと、主いませば心やすけしである。

わたしは主に言う「あなたこそわたしの主、あなたの外にわたしの幸はないと」

終

思い出すままに

安部　タマエ

わたしたちは救われる者にとつても、滅びる者にとつても、神に対するキリストのかおりである。

（Ⅱコリント・二・一五）

七月二十三日

朝起きてガスの栓をひねろうと上体を右下に倒すと右脇腹に走る様な痛みがある。

〃二十四日

同じく腹痛があり。（四回）

〃二十五日

痛みが激しくなる（息が止る程）。市立病院にて受診する。

〃二十六日

レントゲン写真の結果、胆石（小指の先程の石が十個位）。手術をすすめられる。又午後から教会へ行く。先生は御在宅で待つ様に。

一人には能はぬ所なり。神においては能はぬ所なし一

とお祈り下さつた。

〃二十九日

癒されて全く痛みなし。・・・・・・アーメン

めぐみならで　主御自身を
賜物ならで　あたへぬし
神癒ならで　いやしぬし
われはうちに　いまもてり
わがすべての　すべてなる
エスの聖名を　あがめまつらん

（霊感賦・一六）

十二月三日

朝、起きて手が冷たいので、そのまま体操をする。胸の前で悪い方の指先を、しつかりつかんで力を入れて、「イチ・ニイ」と右に二度振り「サン・シー」と左へ二度振る。それを十回やり、下腹を引締めて上体を前後に十回程、屈伸をする。すると腰痛を伴う下腹部の重量感が大変楽になつた。毎朝続ける事にした。もう二年半以上も続いた不快な思いから解放されたのは感謝です。

昭和四十八年一月十日

私は道を歩く時、右足は外側で歩くので中根骨あた

りの骨が肥大し、出つ張り、発赤し熱をもつて、うずく様な痛みがあり、歩行困難になる。これは私が悪い！正しく足を使はなくてはと教えられた。木曜会が終つて先生に祈つて戴いた。その夜は、うずく様な痛みは癒されておりました。

〃二十三日

朝、目をさますと、左の腕の関節が硬直し、押せば疼痛あり。ガスの栓をひねることも水道の栓をひねることもできず食欲不振となる。私は、二十才の時、多発性ロイマチス炎をしたが、その時は正午頃は、やや快くなつたのですが、今度は全く快くならない。それで午後二時に主人の売薬，バイエルのアスピリン，を二錠飲む。それでも快くならないので十時に又、二錠飲んで床につきました。翌朝、手は楽に動いて洗濯も出来ましたが、頭が変になりました。

〃二十五日

木曜会の後、先生にお祈りして戴き全く癒して下さつたと感謝しております。

「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、救の日にあなたを助けた。」（Ⅱコリント・六・二）

「たとい、わたしたちは不真実であつても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである。」（Ⅱテモテ・二・一三）

ああ我ははや死にて
いまいけるは
わがうちにいます
キリストのみ

（霊感賦・一二）

然るにあわれみに富る神、われらを愛する所の大いなる愛により、罪に死し時にすら我らをキリストと偕に生し（なんじら恵によりて救れし也）又、イエスキリストに在つて、われらを彼と偕に甦らせ共に天の処に座せしめ給へり。（エペソ・二・四～六）

「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。」（使徒行伝・四・一二）

アーメン

「ぶどうの木　雅歌」(Ⅲ)

X・Y・Z

才九章

わたしは命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない

（ヨハネ・六・三五）

いつもお手紙有難うございます。

渇いている私に潤わせ、神様の一方ならぬ御愛が身にしみて感じ〃私に従つて来なさい〃と呼びかけて下さる様に思われます。

近況をお知らせしようと思いながらもお店と家庭が一緒ですので何かしら忙しいので子供の教育についても悩んでいます。成績が思わしくないので困りますが、一番大切な事は小さい時に造り主を憶えることだと、あまり変りやすい成績にこだわらず日曜学校に行かせています。喜んで行きますので感謝して居ります。

〃見よわたしは世の終りまでいつもあなたがたと共にいる〃と御言葉通り、不熱心な私ですが、いつもいろんな事から守つて下さり恵の深さをつくづく感じているこの頃です。

○○先生のお母様や幼稚園の先生方が時々来て下さり、色々お話をして下さいます。

○○先生より、この地に住みつくのだから転会届けをするよう再三勧められます。いつもお客様であつてはならず教会で奉仕をしたり教会員との交りを重ねて信仰の上でも強く成長しなさいと勧められますが、今の状態では十一時よりの礼拝ですので礼拝の途中で中食の準備に帰らねばならず、まだ喜んで色々な奉仕は出来そうにありませんのでそのまゝになつております。自己中心でしょうか？、先日先生のお母様よりも勧められて祈つて居りますが、私の信仰の成長の上でこちらに籍を移した方がよいのではないかと思いますが・・・・・。主にある兄弟姉妹がどこここの教会員という区別があるのはおかしいものだとも思つています。

前田教会であふれるばかりの霊の糧を与えられた事を思いなつかしく思います。お便りの中にありました「ぶどうの木」おこがましいようですが送つて下さいませんでしょうか。

才十章

わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。

（Ⅱコリント・四・一八）

いつもさまざまな面からお世話になりありがとうございます。お恵みによつて今日まで守られて感謝しております。木曜会や礼拝により妨げなく主に近ずかせていただけるので本当に感謝しております。

先日はお便りをいただきありがとうございました。失敗だらけの不真実な者をも、悔い改めて主のおことばに従うなら、主が栄光をあらわして下さるということは何とうれしいことでしょう。素直に、ただひたすら主にお従いできるようにお祈り下さいませ。心に望まないことをしてしまいやすい私です、ただ神様だけが本当の希望を与えて下さいます。神様はこんな者をも変えて下さるという希望をもつています。主のあわれみによつてお従いさせていただきたいと願つています。どうかこれからも、お世話になりますがよろしくお願い申し上げます。

主のお恵みによつて〇〇の家も完成間近となりました。いつもお祈りをありがとうございます。そろそろ引越の準備にかかつております。何もかも新らしくなるこの時に、心が主に向つて新らしくされることが一番の望みです。その為にどうぞお祈り下さいますようにお願い致します。

まわりの人の事や、この世にまつわる事々に心をうばわれ、主を忘れることのないように、主をあおいで歩ませていただきたいと思います

才十一章

天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。

（イザヤ・五五・九）

お手紙により詩篇一一九・六五を与えられ、しみじみ感謝致しております。〇日の祈禱会に神様のお言葉を聞いて居ります内に信仰のたりなさを知り、神様の御摂理をしみじみ感謝致して居ります。

私、会社の事に関しましては、我家だけが一番物的に

も精神的にも儀性を払わせられたと、時々情なく腹立たしくも思つていましたが、それを与えられた神様の絶大なる御計画を感謝することは今まで気付きませんでした。

昨年九月からの事をふり返りますと、あの時もこの時も神様は闇の中にも御愛の中に進めて下さつたのだとしみじみと思います。九月給料日に、従業員に間に合う様にそなえて下さつたのも神様の御力に他ならなかつたと今は主に感謝致します。実はしゅとの存命中から香月線の岩崎とかいう所に山が兄と二人名義であり・ました。場所が全く不便な上、小高い山ですから何の役にもたゝず、当時木の苗も植えてこの十年位、山の手入れに年一回一万近くのお金を出していました様な土地で、木がお金になるのは子供の時代だと主人とも話していましたし、何故あの様な商才にたけたしゅとがお金にもならない土地を手に入れたのかと不思議に思つて聞きましたところ、他社の倒産で担保としてしかたなくもらつた物だそうです。それが昨年四月頃より土地不動産屋でうちの山の反対側を整地して住宅地とするため、半分だけそゝり立つうちの山が困るので売つてほしいと向うから話があり、どうせお金がかかるだけの土地でしたので兄と主人も早速売る約束をし三回にわたつて現金が入りました。九月の給料日には会社の集金にはしりまわつて半分は入金出来ましたので、足りない分、山のお金でどうやら間に合つた様なわけでした。十年も何の話もなく、私も車で一度通つてあまり記憶になかつた位役に立たないと思つていた山が一番大事な時期に現金になつて与えられ、従業員に遅配なく支払が出来急場を救つて頂いて神様に感謝する事を忘れていた私、今さらながら申訳なく思います。又給料が間に合わなかつたら今度はどうしようとそればかり思つていましたが、その後は今日まで無事に過ごさせて頂きました。改めて神様のはかり知れない御計画に感謝致しました。

先生のお手紙初めて主人も読みました様です。以前でしたら私の話を全然聞きませんし、信仰の事となると理解に苦しむといつた表情でしたが、信仰的な話にもうんうんと時々聞いてくれます。これで主人が教会に参りますとすばらしいのにと思います。

。

いつもお祈りありがとうございます。嵐の時、力を与えて御愛の御手をもつて祈りにこたえて下さいました神様、平和な静けさの中に御愛の中に感謝の日々を送らせて頂いて居ります。神様らしいなさり方で御導き下さいました事、今しみじみ感じます。周囲の者達にもこういう幸せを味わつてほしいと思い祈つて居ります。〃御聖霊のあるところ自由あり〃しみじみ思います。これから子供達のために所々ひらめく聖書をひもときながらおあかしを書きとめて置こうと思います。今後共よろしく御願い申し上げます。

才十二章

わが義人は信仰によつて生きる。

（ヘブル・十・三八）

たつた二回しか聖会には出られませんでしたが、主に近ずくと豊かにお恵み下さいまして元気が出て参ります。本当にありがとうございました。

「わたしたちは見えるものにではなく見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり見えないものは永遠に続くのである」

「イエスキリストをいつも思つていなさい」

この御ことばを、にぎつて歩ませていただきたいと思つております。

もともと何もなかつたものが生かされ、何も出来ない者であつたのに、いつのまにか何か出来なければいけないと思い込み、心に余裕がなくなり、人の言葉に傷つき疲れていたようでした。

今朝ローマ人への手紙を読んでいて、八章「キリストイエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。律法が肉により無力になつているためなし得なかつた事を、神はなしとげて下さつた。すなわち、御子を罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである」のところで、イエス様が私に変つてすでに神様の前に罰せられて下さつたということを新らたに示されて、イエス様のありがたさを教えられました。そしてこんな者でもイエス様のおかげで神様の前には許されているのだと思い、安心と喜びに満たされました。

自分に目を向けると何もかも自信なく、こわくなり、身動きできなくなるような自分というものをイエス様

におゆだねし、いつもイエス・キリスト様をみつめていきたいと思います。

ほこりのように吹飛びそうな者をとどめて下さる為に、いつもお祈り下さりいつもみ守り励まして下さいます先生の所へお導き下さつたのも神様の深いお恵みでした。心から信頼でき、みたまによつて神様の御旨を語つて下さる牧師先生を持つことが出来た私は本当に幸せです。このことはいつも主人もお客さん等に話しているので、それなら教会へ行けばいいのにとわからなくなります。

年末からうつとうしい顔をして自分に甘えて、充分恵まれていながらすねていたことを申訳なく思います。

具体的な生活ではどのように神様の御旨に従うのかよくわからない状態ですが、神様は求めよさらば与えられんと約束下さいましたから希望を持ち楽んで行きます。

主人は頭が働かないと言つて元気がないのですが（この事は、私の胸におもくのしかかつて苦しいのですが）ローマ人への手紙四章のアブラハムの信仰を思い起こし励まされます。先生から「あなたは恵まれていますよ」と言われたことを思い、確かに感謝しつくせない程に恵まれていると、今は思います。

自分のことばかり書きましてお許し下さい、書かせていただく事によりまとまりがつくように思えて、又先生に聞いていただきたくてペンを取りました。心の願いをまつとうできるように、どうぞお祈り下さいませ。

本当にありがとうございました。今年もイエス様を通して教会のうえに神様の栄光があらわれますようにお祈り致します。

才十三章

わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。

（ヘブル・二・三）

四月三日の受洗と共に神様の子として生まれ変つた私自身を時が経つと共に全身で感じてただただ感謝でいつぱいでございます。

実はこんなにも早く神様が恵んで下さる事考えてもいませんでした。大きなできものののうみをすつかり取り去つてしまつてすつきりした時のようなさわやかささえ覚えます。あんなに頑固だつた私の内面の葛藤がうそのようでございます。受洗からまだ八ヶ月しか経つておりませんのに只今は私の囲りがおだやかで埋まつている事に心から神様の御愛の深さをしみじみ感じております。

思い起してみますと一月二日の新年聖会へ母子で初めて参りまして「見よ、我万物を新にせん」のみことばの前で先生の熱のこもつた御説教にすつかり感動して帰りました。まるで昨日のことのようでございます。

きようは　きようかいへ　いのりぞめにいつたの。二時かんもかかつたのよ。わたしはたいくつでたいくつで　しようがなかつたのよ。ぼくし先生のいつたことばは　あんまりむずかしいので　きいていても　ただかつこうだけ。それじゃ　つまんないでしよ。でもおかあさんたちは　テレビをみているように　ぼくし先生のかおをみてラジオをきいているように　ぼくし先生のお話を　きいているの。おかあさんたちつて　しんぼうづよいのね。

子供のらく書きを抜き書きしてみました。

その頃はまだ木曜会だけで日曜礼拝にも日曜学校にも失礼していました。今考えると不思議な気がいたします。只今は日曜礼拝を中心に私共母子の生活のリズムが規則正しくスムースに回つている事を思い、今更乍ら神様を抜きにした生活が全く考えられなくなつている事が一番大きな感謝でございます。

主に信頼して善を行え
そうすればあなたはこの国に住んで安きを得る
主によつて喜びをなせ
主はあなたの心の願いをかなえられる
あなたの道を主にゆだねよ
主に信頼せよ、主はそれをなしとげ
あなたの義を光のように明らかにし
あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる
（詩篇・三七）

主にゆだねた私共母子の生活が根強く張つて、真実のものとしてほんとうに身になりますように、今年よ

り来年へと成長して参りますようにただ祈つて止みません。

今やつと私自身が救われましたばかりだと申しますのに、ほんとうにおこがましいようでございますが、重荷を負つて苦しんでいられる方々を私の回りで見るにつれ、イエス様のことを大きな声でお知らせしたい衝動にかられます。

新年聖会の折りに「神様のみことばが神様である」「信仰の土台は経験でも感情でも業でもなく神の言葉を信頼することである」とおつしやいました事が真実として私の中で生きております。神様のみことばの重さをひしひしと感じております。

○

「午後三時のいのりのとき・・・・・」の御言葉、身にしみ入るような気持で毎回聞いてまいりました。今迄の自分がとてもつまらなく感じられつい涙がにじみ、言うに言われない悲しみに落とされたような気持になり、又同時に青々と繁つたまつただ中に自分がスツパ、ダカであたゝかくつゝまれたような、生まれ変わるような気持を味わいました。これからもイエス様の御言葉を深く味わいながら、かみくだきながらイエス様のおひざのもとに近づきとう御座います。

才十四章

神には、なんでもできないことはありません。

（ルカ・一・三七）

神様のお働き

「わたしたちは見えるものにではなく見えないものに目を注ぐ」

教会にはげみ熱心な親しくして頂いている姉妹とのいろいろのお話から、私に、あなたも望んではげんで信仰感謝を与えられたのでしようと問われ、とつさに、のぞんでいたわけではなく只祈つていました、と返事致しました。帰宅後思い出しまして、考えて見ましたけれど、その通りで、神様の御愛を考えますと私は申訳ない位働きのない者だとしみじみ思います。

このようになつてほしいと祈り望み精を出して、望みがきかれました時、感謝の祈を捧げた事はありますが望みとは反対の結果に落胆し礼拝になぐさめられた事も度々あります。その様な教会生活（信仰生活ではな

く）長い間だらだらと続けて参りました。

四年前でしたがある事で見える状態では全く望みはなく、まちがつてもあの様に簡単にゆくものとは思われない事態に直面しまして、只々朝起きて掃除の途中常に不安が心をゆさぶりますと祈り又祈りの六ヶ月間、神様が子供の手術を支えられ、全く平静に事を終らせて頂きました。手術の前日お医者様に、注謝もこわい位気の弱い子ですから全身麻酔でもない眼の手術ではと、私の心配をもらしていましたものですから、すんでしまつた後お母さん子供さんのどこを見ていますか等と言われましたが、私もすみで腰かけて四十分、終りましたとの声で、子供のありがとうございましたと言う蚊のなく様な声に神様に感謝の気持で一杯でございました。（半年前、八幡の別のお医者様が子供を見て、こんな甘えつ子は眼の手術は出来ない、と言われましたので只感謝でした）

一年半前から約一年間の会社のゆさぶられに、行先どの様になるか毎日毎日不安の中に常に祈り続けて参りました。私は何の働きも努力も出来ませず、仕事一筋の主人に対して私の望みは全く可能な事ではなく、どうなる事かと神様が道を開いて下さることを祈り続けて参りました。人間の力ではどうにもならないと思われる所に道を開き、創造主であらせられる神様はいと小さき者のためにもよりすがる者をあわれまれ、力を与えて下さり、生活が不安定となるとけんけんごうごうとなりがちなこの世で人一倍気が小さく少しの事でも心配する私の歩みをととのえられ支えられて平和へ導いて下さいました。

家族の中の一人の祈りにも耳を傾けて下さる神様の御愛にひたります時、主人の救いの日を祈つて居ります。

その後もいろいろな事がございましたが、主を頼りにしすぐ父なる神様と祈れる事、お導きを感謝致しております。

「あなた方の会つた試練で世の常でないものはない神は真実である、あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか試練と同時にそれに耐えられるようにのがれる道も備えて下さるのである」

先日礼拝の時問題がない時こそ危険だと教えられま

したが、神様のお恵に馴れるとつい自我が出てしまうおろかな私の目を見えない神様に目を注ぎ祈りながら感謝の中に過ごさせて頂くことが出来るのも神様の大きな御愛だと感謝です。

色々な問題の中で神様の大きな御愛を知らしめて下さいました事「神は愛なり」感謝です。

「感謝して受くる時　捨つべきものなし」感謝です。

「主の道すじを直くせよ」私には出来ないけれども神様には出来ない事はありません、感謝です。

○

発見

神様の御愛によりたのみ、与えられました事は思い出しますたびにさわやかな感謝となります。経験努力で計画をたて望み見て与えられました事は、望みが現実となつて感謝はしましてもむなしく不安が残ります。

「主の事を信ぜし者は幸いなり　そは主の語り給いし如く　必ず成るべければなり」

終

「ヒヨコの一歩」

安東篤良

昭和四十四年一月某日（雨）

夜九時三十分頃下校。電車の中でN君にMさん（後私の奥さん）、Sさんと帰る。Mさんが「門限が十時なのですが。」という。「そりゃ、親の信頼がないからでしょう。」「信頼されていることを知つていれば裏切るようなことはできませんよ。どんなに遠く親元から離れていてもね。」こんな話をしながら中央町に着いた。二人の女性は下車してしまつた。

私はY大学夜間の三年生、ふとしたことから学生自治会の役員をすることになつた。その日は短大自治会役員（N・M・S等）との初会合であつた。これが私の奥さんにお目にかかつた記憶に残つている最初である。「ヨレヨレのコートに、すりへつた皮靴、黒い大きなカバンをぶらさげ、風邪のために白い大きなマスクをし、目ばかりギョロギョロした世帯地味た三十男だつた。」　とは彼女の私に対する第一印象だつたそうだ。「男子一旦志を立つれば、女に労を費やすな

どもつてのほか。」と思つていた自分なので彼女といえども当時は全く無視していたのだつた。五月初旬、彼女曰く「私も教会へ行つてみたいのですが、つれて行つて戴けませんか。」もとより一人でも救いにあずかつてほしいと願つていた私「最初のうちは礼拝は難しいだろうから夜の伝道集会に出席しなさい。お電話しますから。」とさつそく引きうけた。これを機会に礼拝にしか出席しなかつた自分も伝道会に出席するようになり、日曜日の夜が楽しくなつた。集会が終ると教会のこと、集会、自治会、家族のこと等を話しながら中央町の彼女の家まで歩いて帰つた。一ケ月位すると、どうも胸の中がモヤモヤする。男というものは自分の感情とは逆のことを言つたり、行つたりするものらしい、私も例外にもれず「あなたを友人として教会につれていつているのですからそのつもりで」とか「人間、二兎追うものは一頭も得ずという。　今は勉強に励まねばならない時で、特別な感情は持たんで下さい。」とか言つてしまつた。

しかし、もやもやは大きくなるばかり。仕事に、勉強に没頭しているときはいい。ふと休みになると彼女のことが頭に呼んでくる。いけないと思い努力する。少しはいいが又出てくる。そしてその出没の回数は、どういうわけか次第に多くなる一方だつた。七月十一日母から父の十二脂腸潰瘍の手術を伝えてきた。「もしや死ぬのでは」と感じた時、今まで持つていた父の像が、ガラガラと音をたてて崩れた。と同時に家、親兄弟、結婚をヒシヒシと肌に刺すように感じた。

父が死ぬかも知れないという不安と、彼女への想いとが重復する時自分の力で、どうすることのできない、いらだちといきどおりで混沌としてしまつた。以前から、これらのことについて祈つてはいたものの、何の心安まるものとは、なつていなかつた。「これでもクリスチャンのはしくれ」祈らずにはおれない。「どういうことなのですか、神様！神様あなたは『人に働きかけて願いをおこさせ、かつ実現に至らせるのは神である』（ピリピ・二・一三）ともあります。これは肉の思いでしようか。あなたの導きでしようか？」と祈る。・・・・しかし分らん。まさに昔の流行歌にあつたように「愛（恋）した時から苦しみが始まる」だつたのである。「デモクリスチャン」の斗いは続いてい

たのである。「御導きなのか、肉の思いなのか。」、・・と。何度か、こじつけの理由をさがして聖書をめくる。その度に「結婚とはそんなものじゃない。」と神様の導きの重大さを教えて戒き、またふりだしに戻る。この間約二ヵ月。結論「恋の色眼鏡をかけて神様の御導が見えるはずがない。」と、むりやり出した。というより、この苦しさのあまり、どうにでもなれと投げ出してしまつたと言つた方が適当だろう。「どうせ神様の御旨だけしか行われないのだ。こんな苦しい思いなんて捨ててしまえ。彼女なんてどうにでもなれ。」と投げ出した時、ポッカリと開いた心に光がさすのを感じた。その時、Ⅱテモテの七～八の聖言が与えられた。そうだ自分は神様に従おう。これに苦労してもついてくるならいい。ついて来ないならそれまでのことだ。　神様、こう決めましたと祈つた時、急に楽になつた。又、父も順調に快方に向つているとのこと、感謝した。そして七月二十六日、魚町の喫茶「ロイヤル」で「僕は物も金もない。ただ、どんな中でも神様に従つて行く。この為、苦労を共にする覚悟があるなら、一諸にクリスチャンホームを作つて下さいませんか。」生来の小心者には、この発言は清水の檜舞台から飛び降りる勇気がいつた。「ハア？ハア、しばらく考えさせて下さい・・・・」かくて八月一日「はい、よろしくお願いします。」との返事をもらつたのである。それから二年八ヵ月が過ぎた。この間も、与えられた聖言の約束も、ともすれば不信仰になりやすい中で、ただその度に、もう一度、結婚ということ全体を神様の前に「祈つては献げ、祈つては献げ」の繰返しであつた。その度に聖言に立ち帰り、「憶する霊ではなく、力と愛と慎みの霊」をもつて強められ、神様の約束された時と確証を求めて待つていた。初めの（四十四年秋頃）うちは、来春には式をあげたいと考えていたのだが、その頃になると、もう少し、お互が神様のことを知らねばならないと思うようになり、さらに、せめて彼女が受洗させて頂くまでとは思い、その時が来ると、もう少し信仰の確信に立つて歩くようにならねばといろいろ注文をつけるようになつた。が、この時、そうではない。「時と場合は神様の手のうちにあり」神様が一番いい時を定めて下さると、おまかせした。「本当に神様が私達を結婚させて下さいました。

といえるようにならねばならない。」と心に決め彼女にも言つて祈つた。結婚を意志表示して一年すぎ、二年すぎ、三年が来ようとしていた四十七月三月も終りの二十六日、結婚を決意した。・・・・・・

まず、今まで不可能と言われていたのが祈つていた住宅の問題が解決した。三月二十一日、財務局から「東城野の宿舎か食糧事務所折尾支所に割当てられましたよ。」「該当者は安東さんにです。」と庶務係長。既婚者でもなかなか割当てがこなかつたのに、どういうことだろう。結婚をしなければならないのだろうかと思いめぐらす。祈る。あまりにも重大なことなので決められず、榎本先生に決めていただこうと教会に電話をする。「おるすですか。」どうしたらいいのか。又一日すぎる。今日は、おられるだろうからと電話をした。「関西に行かれてます。月末までは帰られませんが、どんな御用でしょうか。」やさしいけど非常な調さんの声だつた。「やつぱり自分で決めねばならない。」

二十六日午後六時、もう事務所には誰もいなかつた。「この住宅はどういうことなのでしょうか。結婚はこの時なのでしょうか。」と窓から足立山をみあげながら神に問う。ヨシュア記一・九の聖言が与えられた。それでも、自分の信仰が持てずに今度は「この聖言が導きだという保障を下さい。」と、もう一度神様に祈つた。そして静まつている時、Ⅰテモテ四・三ー五の御言を戴いた。その中で三節の聖言により、信仰をもつて感謝して受けようと決め、感謝の祈りを口にした時、ああ、あれもこれも皆、神様が最善となしていて下さつた。とあの詩篇八篇の四節の聖言を思い浮べながら感謝で胸がいつぱいになつた。

そして三月二十九日、榎本先生に申上げ、伊規須先生御夫妻を御媒しやくとし、五月二十八日結婚させて戴いた。このヨチヨチ歩きのヒヨコをもつたいない恵みで満たして下さつた神様に心から感謝し、また皆様方にもお祈りいただきましてありがとうございました。

終

「文芸コーナー」

セラ

伊規須泰子

今　我身をかえりみ
　くずれたるエホバの壇を繕ろう。
今　主を見つめ
　すべてを献げて従がわんと　誓う。
主は愛なれば
主は真実なれば
　そのひとあしに　恵をたもう
　そのひとあしに　力をたもう
主の御業をみよう
　たのしみて。

「四十七年度　十二ヶ月」

正野与志尾

一月　冬凪きの波津の浦曲の初句会
二月　松過ぎて臥すほどもなき風邪ごこち
三月　柳町名残りの柳芽吹きとり
四月　休日の教師や一人畑打つ
五月　春の蚊のテレビをよきりて消えにけり
六月　傘立てゝ靴みがきをり駅薄暑
七月　古道は杣の通路合歓の花
八月　夕焼けて一湾しばし金色に
九月　磧の湯に下る灯一つ天の川
十月　月祭る甘藷二つ三つ買い戻り
十一月　藁屋解くほこりかぶりし実南天
十二月　雑用に追はれ日曜日短か

「主の前に受け入れられるようにこれをささげなければならない（レビ一・三）」

調　悠子

「我々の今なお滅びざるは、エホバのいつくしみと、そのあわれみの尽きざるとによるなり。」

（哀歌三・二二）

私は昭和四十四年五月十二日、献身を願い出て以来、榎本先生ご夫妻の下に修養させていただいておりますが、今私があるのは唯、神様のあわれみといつくしみ故でございます。実は神様の前に〝献身〟とは偽りで、その動機は献身者との結婚にございました。

良心の苛責もなく〝仕事も、家も〟捨てました等と傲慢な心を持つて、再び主を十字架につけるような事を平気でなし、み心をお傷めしつづけて参りました。今、ふりかえりまして、何故、私は主のご愛に背いて来たのかと悔いられてなりませんが、二年間悔い改める事なく、聖なる御臨在を汚して参りました。しかし、主は、あわれみ豊かな方で背きつづける私を愛をもつて見守り、待つていて下さいました。現実に、榎本先生御夫妻の愛のおとりなしと寛容さで支えられて参りました。

かえりみますと、主のみ救いにあずかつたその時に主は、この様な私に「Ｉヨハネ・三・一六」の、おことばを生涯のメッセージとしてお与え下さいました。そのおことばどおり、すぐる十年間、霊・肉・共に主の御愛溢れるお取り扱いを戴いてきました。

全く受身の信仰で「主は、我が為に生命を捨て給えり。それによりて愛ということを知りたり」の部分だけを受けとめていたのです。しかし、だんだん「我らも又、兄弟の為に生命を捨つべきなり」の聖言に迫られ、それは「献身」を願う心とかわつてきました。かといつて、一人で献身の道をたどる勇気もなく、事情も許されないので、祈りつづけておりますと、ふとしたことから伝道者の方との縁談がおこり、これ幸いにと、まるで餌につられた魚のように、事情も何も、かまわずに「献身」（このことばをつかわしていただけるなら）を願い出てしまつたのです。しかし神様がこのような者を受入れられようはずがありません。その数日後に、その餌はとり除かれました。「我々は、為

せし事の報いを受くるなれば当然なり」主のみ旨をさとることもできずに行く先を知らずに二年間、主に背を向けて、さまよい歩きました。

「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから。（イザヤ六・五）」

日を経る毎に、神の前に犯した罪に苦しみ、聖き臨在に、とどまることができなくなりました。そこで、はじめて私は、本心に立ちかえり、献身の動機は肉と欲から出ていたことを。又、汚れた足で臨在をふみにじつていたことを悔い改めました。どんな裁きを受けようとも、我は当然なり。一切、み手にお委ね致しました。その瞬間「汝の罪許されたり」のみ声を聞き、十字架を仰がせていただきました。そして残された余生が、死ぬために生きるものであることを示めされ「彼と共に死なば、彼と共に生きん。（Ⅱテモテ二・一一）」のおことばをいただきました。

何と神様は、あわれみといつくしみ豊かな方でございましょう！。この時、私は信者としての才一歩から出直そうと思いましたが、一度、檀に捧げられたものは、自分勝手に、とりおろすべきではないことを知り、主の御愛と御血によりすがり、身と霊をお返しさしていただきました。しかし、だんだん、自分を見つめて失望し、自らの内に、献ぐべき良きものの何一つないことを思つて、苦しみ、もがき、昨年の暮には主の御降誕を仰える元気さえ失なつておりました。「このように汚れた者が献身者では、主のみ名を汚します。しかしこの私には、どうするすべもありません。主よ、どうしたらいいでしょうか」と祈りつづけました。たしかに、主は、真実なお方でございます。地の涯に、さまよう私の叫びに対して聖なる山から答えて下さいました。昨年十二月十七日のご礼拝に於て「それを、ここに持つて来なさい。（マタイ一四・一八）」の、おことばをもつて私を招き入れて下さつたのです。

「罪も汚れもあるまま、今の調悠子そのままをここに持つて来なさい。」と迫つて下さいました。その瞬間、マリヤと共に、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。（ルカ一・三八）」のおことばで、声高らかに、お返事致しました。主の

御血の中に一切をお委ねいたしました。この様な者を主がお受入れ下さるとは！。その主のご愛とあわれみの深さを思い出す時「我らも又兄弟の為に、生命をすつべきなり。（Ⅰヨハネ三・一六）」の聖言に、お従いせずにはおられません。今、願うことは、死に至るまで忠実でありたいと、生くるにも、死ぬるにも、この身によつて主のみ名の崇められることのみでございます。日毎に、献身の壇を、固く築きつづけて参ります。全てをご存じの上で主と共に許し、愛をもつて導き、おとりなし下さつた榎本先生ご夫妻に対して深く感謝いたしております。蔭にあつて、お祈り下さつた多くの聖徒方へ、主が豊かにお報い下さいますようお祈りしております。

終

エベネゼル

（一九七二・一一～一九七三・一のこと）

我らの尚ほろびざるはエホバのいつくしみにより、そのあわれみのつきざるによる

伊規須太郎

一、顧りみと待ち望み

△あなたは初めの愛から離れてしまつた。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起こし、悔い改めて初めのわざを行いなさい。（黙・二）

△見よ、わたしは戸の外に立つて、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいつて彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。（黙・三）

△見よ、わたしはすべてのものを新たにする。書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである。事はすでに成つた。わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである（黙・二一）

△今は主のはたらかれる時です。（詩・一一九）

△わたしは苦しまない前には迷いました。しかし今はみ言葉を守ります。あなたは善にして善を行われます。あなたの定めをわたしに教えて下さい。（詩・一一九）

△賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。（エペソ・五）

△多く与えられた者から多く求められ、多く任せられた者からは更に多く要求されるのである（ルカ・一二）

二、あわれみによる招き

○万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アーメン（ロマ・一一）

○ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる。恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのものだ。（イザヤ・四三）

○神のあわれみによつてあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である（ロマ・一二）

○あなたがたは知らないのか、自分のからだは神から受けて自分の内に宿つている聖霊の宮であつて、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払つて買いとられたのだ。（Ⅰコリント・六）

○だれでも、誓願の供え物、または自発の供え物を燔祭として主にささげようとするならば、あなたがたの受け入れられるように牛・羊、あるいはやぎの雄の全きものをささげなければならない。すべてきずのあるものはささげてはならない。それはあなたがたのために、受け入れられないからである。（レビ・二二）

○わたしは贈り物を求めているのではない。わたしの求めているのは、あなたがたの勘定をふやしていく果実なのである。わたしは、すべての物を受

けてあり余るほどである。エパフロデトから、あなたがたの贈り物をいただいて、飽き足りている。それは、かんばしいかおりであり、神の喜んで受けて下さる供え物である。（ピリピ・四）

○あなたがたは、かつて自分の肢体を汚れと不法との僕としてささげて不法に陥つたように、今や自分の肢体を義の僕としてささげて、きよくならねばならない。（ロマ・六）

○この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となつて、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となつて、イエス・キリストにより、神によろこばれる霊のいけにえを、ささげなさい。（Ⅰペテロ・二）

○弟子たちは言つた、わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持つていません。イエスは言われた、それをここに持つてきなさい。（マタイ・一四）

三、聖徒の模範

◇わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように。（ルカ・一）

◇アブラハムは主が言われたようにいで立つた。（創世記・一二）

◇アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクとを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立つて神が示された所に出かけた。（創世記・二二）

◇箱をかく者がヨルダンにきて、箱をかく祭司たちの足が水ぎわにひたると同時に、ヨルダンは刈入れの間中、岸一面にあふれるのであるが、上から流れくだる水はとどまつて・・・・・。（ヨシュア・三）

◇エリヤは彼のかたわらを通り過ぎて外套を彼の上にかけた。エリシヤは牛を捨て、エリヤのあとに走つてきて言つた、わたしの父母にくちづけさせてください。そして後あなたに従いましよう。エリヤは彼に言つた、行つてきなさい、わたしはあなたに何をしましたか。エリシヤは彼を離れて帰り、ひとくびきの牛を取つて殺し、牛のくびきを燃やしてその肉を煮、それを民に与えて食べさせ、立つて行つてエリヤに従い、彼に仕えた（列王上・一九）

◇わたしについてきなさい。あなたがたを人間をとる漁師にしてあげよう。すると彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従つた。・・・・・彼らをお招きになると、すぐ舟と父とをおいて、イエスに従つて行つた。（マタイ・四）

◇信仰によつて、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは彼が報いを望み見ていたからである。（ヘブル・一一）

◇御子をわたしの内に啓示して下さつた時、わたしは直ちに、血肉にも相談せず、また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビアに出て行つた。（ガラテヤ・一）

◇栢植不知人師の壇上の生涯。（ペンテコステ前後、第九章）

四、骨の中の火

◎もしわたしが、主のことは、重ねて言わない、このうえその名によつて語る事はしないと言えば、主の言葉がわたしの心にあつて、燃える火のわが骨の中に閉じこめられているようで、それを押えるのに疲れはてて、耐えることができません。（エレミヤ・二〇）

◎もしわたしたちが、気が狂つているのなら、それは神のためであり、気が確かであるのなら、それはあなたがたのためである。なぜならキリストの愛がわたしたちに強く迫つているからである。（Ⅱコリント・五）

◎もしあなたの中からくびきを除き、指をさすこと、悪い事を語ることを除き、飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、あなたの光は暗きに輝き、あなたのやみは真昼のようになる。（イザヤ・五八）

◎あなたのみ手が昼も夜も、わたしの上に重かつたからである。（詩・三二）

五、再び待ち望み

☆完全な自由の律法を一心に見つめてたゆまない人は、聞いて忘れてしまう人ではなくて、実際に行う人である。こういう人はその行いによつて祝福される。（ヤコブ・一）

☆御霊を消してはいけない。預言を軽んじてはならない。（Ⅰテサロニケ・五）

☆主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。主を待ち望め。（詩・二七）

主はおのれを待ち望む者と、おのれを尋ね求める者にむかつて恵みふかい。（哀・三）

☆いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない。（イザヤ・六四）

☆だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従つてきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。（マタイ・一六）

☆もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従つて来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。（ヨハネ・一二）

☆われを引きたまえ、われら汝にしたがいて走らん。（雅歌・一）

☆あなたがたは、こうして、それを食べなければならない。すなわち腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取つて、急いでそれを食べなければならない。これは主の過越である（出エジプト・一二）

☆手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである。（ルカ・九）

☆主にあつては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。ある人々がおそいと思つているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべてのものが悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである。（Ⅱペテロ・三）

六、神による祭司

◎わたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家に忠信なるものである。彼とは、わたしは口ずから語り、明らかに言つて、なぞを使わない。彼はまた主の形を見るのである。

（民数記・一二）

◎レビの家のために出したアロンの杖は芽をふき、つぼみを出し、花が咲いて、あめんどうの実を結んでいた。

（民数記・一七）

◎あなたはレビ人を、アロンとその子たちとに与えなければならない。彼らはイスラエルの人々のうちから、全くアロンに与えられたものである。あなたはアロンとその子たちとを立てゝ祭司の職を守らせなければならない。ほかの人で近づくものは殺されるであろう。

（民数記・三）

◎自ら進んで聖徒たちへの奉仕に加わる恵にあずかりたいと、わたしたちに熱心に願い出て、わたしたちの希望どおりにしたばかりか、自分自身をまず、神のみこころにしたがつて、主にささげ、またわたしたちにもささげたのである。

（Ⅱコリント・八）

七、殺さるべきもの

★人が自分の持つているもののうちから奉納物として主にささげたものは、人であつても家畜であつても、また相続の畑であつても、いつさいこれを売つてはならない。またあがなつてはならない。奉納物はすべて主に属するいと聖なる物である。またすべて人のうちから奉納物としてささげられた人は、あがなつてはならない。彼は必ず殺されなければならない。

（レビ・二七）

★ナジルびとたる誓願を立てている間は、すべて、かみそりを頭に当ててはならない。・・・・すべて死体に近づいてはならない。・・・・・もし人がはからずも、彼のかたわらに死んで、彼の聖別した頭を汚したならば・・・・・彼の頭を聖別しなければならない。彼はまたナジル人たる日の数を、改めて主に聖別し、一才の雄の小羊を携えてきて、愆祭としなければならない。それ以前の日は、彼がその聖別を汚したので、無効になるであろう。

（民数記・六）

☆わたしが起きて、わが愛する者のためにあけようとしたとき、わたしの手から没薬がしたたり、わたしの指から没薬の液が流れて、貫の木の取手の上に落ちた。わたしはわが愛する者のために開いたが、わが愛する者はすでに帰り去つた。

（雅歌・五）

☆ほかのおとめたちもきて、ご主人様、ご主人様、どうぞあけてくださいと言つた。しかし彼は答えて、はつきり言うが、わたしはあなたがたを知らないと言つた。（マタイ・二五）

八、サムソンの最後

※ああ、主なる神よ、どうぞわたしを覚えて下さい。ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、わたしの二つの目の一つのためにでもペリシテ人にあだを報いさせて下さい。（士師記・一六）

※中柱の一つを右の手に、一つを左の手にかかえて身をそれに寄せ、わたしはペリシテ人と共に死のうと言つて、力をこめて身をかがめると、家はその中にいた君たちと、すべての民の上に倒れた。こうしてサムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かつた。（士師記・一六）

※人があなたの値積りに従つて主に身をささげる誓願をする時は、あなたの値積りは、二十才から六十才までの男には、その値積りを聖所のシケルに従つて銀五十シケルとし、女には、その値積りは三十シケルとしなければならない。・・・・・・また六十才以上には、男にはその値積りを十五シケルとし、女には十シケルとしなければならない。（レビ・二七）

※畑をヨベルの年からささげるのであれば、その価はあなたの値積りのとおりになるであろう。もしその畑をヨベルの年の後にささげるのであれば、祭司はヨベルの年までに残つている年の数に従つて、その金を数え、それをあなたの値積りからさし引かなければならない。（レビ・二七）

九、高ぶりに対する警告

口わたしはあなたの従順を堅く信じて、この手紙を書く。あなたは、確かにわたしが言う以上のことをしてくれるだろう。（ピレモン）

口わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に誇とするものは、断じてあつてはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまつたのである。（ガラテヤ・六）

□あなたは、きょう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならない。あなたは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、また牛や羊がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、おそらく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう。

（申命記・八）

一〇、憐みにより臆せず

△このようにわたしたちは、あわれみを受けてこの務についているのだから、落胆せずに、恥ずべき隠れたことを捨て去り、悪巧みによつて歩かず、神の言を曲げず、真理を明らかにし、神のみ前に、すべての人の良心に自分を推薦するのである。

（Ⅱコリント・四）

△主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。わが魂は言う、主はわたしの受くべき分である。それゆえ、わたしは彼を待ち望むと。

（哀・三）

（一九七二・一二月はじめ、退職手続を致しましたが、後任者の人事が決らぬため、暫く待たされ一九七三・二月をもつて退職することになりました。）

（一九七三・一・二七記）

「退職に際して」

（社内に対する挨拶状原稿）

八幡製鉄所・技研・管理課

伊規須太郎

私はこのたび思い出の多い新日鉄を退職することになりました。顧みますと入社以来約二十三年間、皆様がたの一方ならぬ御世話になり、暖かいお交わりの中に、今日まで過ごさせて頂いたことは、まことに有難いことでこゝに厚く御礼を申し上げます。

さて、このたびの退職は思い付きや、一時の感情によるものではなく、時満ちて、真理に従おうとする淡々とした決断によるものであります。

私が今日まで保つて来た、仕事に対する基本姿勢は、人間としての生き方を考える中で、仕事を主としない、極端にいえば仕事はレクリエーションであり楽しむためにする、金銭は問題にしないという事でありました。しかし、この事は決して仕事を軽んずるものでなく、むしろ与えられた仕事には全力投球し、時に寝食を忘れる事があつても当然と考えてまいりました。

何故、私が主としないか、何が私の主であるか私の経歴の中で若干述べさせて頂きたいと存じます。

大正の末、クリスチャンホームに生れた私は、父が海軍の軍人であつた事もあり、純情に燃えて海軍に身を投じ、才二次大戦開戦の年にはすでに海軍兵学校の生徒でありました。卒業後は西太平洋各地に転戦し、何度か死地を越え、負傷・沈没を体験し、今も弾片が体内に残つております。しかし戦いに利あらず遂に敗戦を迎えたあと、しばらくは乗務していた駆逐艦で海外各地からの復員輸送に従事するなどして居りましたが、昭和二十二年復員して田舎に帰り静かに人生を考えた時、私の心に非常な渇望が起り、キリスト教の信仰を求めるようになりました。それまでの私は、クリスチャンホームに生れたとは言つても、時代の流れに流されて何も考えなかつたのですが、この時になつてはじめて「人間とは何か」について目を開かれたのです。そして私の不安と恐れと行詰りが人間としての道を踏み外している結果であり「神をおそれその誡命を守る」ことがすべての人の本分であると知り、イエス・キリストを主と信じて生涯を転換し、こゝに土台を据えたのであります。

当時、私は正規職業軍人という経歴から、GHQの指令により一切の公職に就く事を禁ぜられ、辛い思いをして居りましたがある方のお世話で当社に入社し、今日に到つたものであります。

その間、私は一貫して人生の目標を追い続けてまいりました。私に何かが出来るとか、私が何か出来上つたものであるなどとは毛頭考えておりません、むしろ足らぬ所ばかりであり、私にはただ

「多くの聖徒の生涯を通して保証された確かな望にもとづき、目を高くあげて目標をめざす姿勢」

があるのみです。

従つて私は仕事と信仰とを相対するものとして捉えず、むしろ仕事は人生の基軸をめぐる一つの局面であり仕事を愛してもこれを主としない時、かえつて真の仕事が出来るのではないか、これが個人にとつても企業にとつても幸の道であろうと感じて居りました。

しかしながら、私の中に点ぜられた火はいよいよ燃え上り、「人が生涯をかけて追い求むべきものは何か。一切を拋つても購うべき真の宝は何か」「人がこの世を終る時、如何なる清算をなし得るか。人生の真の報いは何か」と強く迫られ、特にこのたびは、人からでない招きと導きにあずかり、私は私でなければならない使命の道を往く事を決意した次第であります。

現在、世には多くの行詰りが表面化しておりますがそれらの原因は結局一点に尽きるのではないかと思われます。すなわち人が、造られたものとしての道を踏み外し神の座につこうとしたためであります。このことに思いを致すとき人類が神に立ち帰る事は最も緊急を要する事と信ずる者であります。従つて私は問題の解決がデモや座り込み、署名運動等々人間的な働きで成し遂げられるとは考えず、すべての人の心をひるがえし給う見えぬ力によらねばならないと信じております。

今後の生活に、人間的な保証は何もありません。この点については皆様が種々ご心配下さるお気持ちは有難いのですが私は「先ず神の国と神の義とを求めよ、そうすれば、すべて添えて与えられる」と言う聖書の言葉を信じて居ります。その生涯がたとい貧しくあつたとしても私のために備えられた道を力一杯走り抜きたいと願つて居ります。

退職に際して、皆様がたに多大の御迷惑をお掛けする事と存じますし、私自身心残りな事も種々ございますが、時機というものが、かけがえのない尊いものである事を思い、あえて決意した次第です。何卒事情をお汲み取りの上、御容赦下さいますよう切にお願い申し上げます。

尚、当分の間は左記に居りますので、従来同様ご指導とお交わりを賜わりますようお願い申し上げます。

記

804 北九州市戸畑区小芝二丁目一の一三
八幡前田教会　戸畑伝道所
（TEL　〇九三　八七一　八五三一）
又は
805 北九州市八幡区前田一丁目一〇の三
キリスト伝道隊　八幡前田教会
（TEL　〇九三　六七一　一三八六）

以上

（一九七二・一二・一三記）

「こうして彼は眠りについた」

（吉田志津枝奥様の口述）

私の主人は信仰生活五十年になります。これも神様のお恵と、皆様のお祈りのお隠げと感謝致しております。

主人は脳軟化症で、私はのどを悪くし老人二人の生活でしたので、三年半前に、古賀町にある福岡東病院へ二人共入院致しました。私の病気は三ヶ月で完全に治りましたが、主人の病気は精密検査の結果、胃ガンということでした。とても信じられません。弟の法晴さん（元北九州市長）が、小倉ガンセンターでもう一度たしかめるがよかろうと申しまして、古賀の先生や看護婦に附添われて小倉ガンセンターに連れて行かれ、そこでも精密検査致しました所、院長先生や他の先生方に見てもらいましたが、やはり間違いなく胃ガンということで直ぐ手術の準備をしましようということになりました。私たちは驚きました。手術を受けるなら宗像町に住んでいましたので、なるべく近くの古賀の病院で受ける方が何かと便利がよいので、

古賀の病院で手術を受けることに致しました。主人には胃潰ようと言うことにして手術を承認してもらいました。

高令ですから、しばらく体調を造らねばなりませんでしたので四四年八月に入院し、手術を受けられるようになりましたのは四五年一月十八日でございました。先生方も三日前から準備を整え、病人には、その心得の箇条書を読んで聞かせ、親族や息子などにも十八日に手術をする旨を電報や電話で知らせておりましたら、その時になつて、熱を出しましたので、手術はしばらく見合わせなければならなくなりました。それで又中止の電報を打ちました。

毎日三八度くらいの熱が三ヶ月も続いて、肺炎を引起しそうになり周囲の者が大変心配しました。

体が、大変衰弱致しましたので息子たちが相談し合つた結果、医師も手術しても受合うことは出来ないと言いますので、手術をして、痛い目に合わせるより、手術をやめた方がよかろうということになり中止することに致しました。肺炎の方はすつかりいやされガンはそのまま治療受けることになりました。

三年半の間苦痛を訴えた事もなく病人のように見えませんでした。食事も三度三度いたゞきました。

いつもお祈り致しておりましたので、看護婦さんは、不審がつて或る時どうして食事しないのですかと尋ねられたので、お祈りしているのですよ、と私が言いましたらそうですかと納得されました。

主人は元小学校の先生でしたので生徒さんがよく見舞に来られました。生徒さんと言つても、五十才にはなりますが、有難いことです。主人はとても喜こんでおりました。

長男は五年前東京の三菱化成に転勤になつておりましたが昨年の十一月半ば頃黒崎の工場に手不足で忙しいから帰つてくれということで、家族の者は東京にいて長男だけ家に帰ることになりました。学校があるので三月の学期末で転校を待つて帰らせることに致しました。

仕事が忙しいので長男はまだ一度しか見舞に来ていませんがその時主人は長男の名前が、「みのる」と言いますので、「みのる帰つて来たか」と言つて大変喜こびました。

このことも今にして思えば神様の主人の昇天を予知されてお備え下さつたお恵みで、何と至れり尽せりのあわれみ深いお方でございます。

主人は角力を見ることが好きで白黒のテレビで見て楽しんでおりましたが、長男がカラーテレビを東京から送つてくれました。所がひま取つてなかなか到着致しませんで角力もすんでしまつて昇天の前日にやつと着いたのですその日は土曜日で、土曜・日曜は運送屋の取扱いは出来なくなつているそうですが、渡して下さつたので、主人はカラーテレビを見て大変よろこびました。

明日は死ぬという様子はありませんでした。医師も毎日診察して下さいますが別に何ともおつしやいません。翌日少し様子がおかしくなりましたので、子供等に電報打つたのでしたが岐阜にいる次男は臨終には間に合いませんでした。

有難いことに長男は土曜日から来ておりましたのでその日は病院にとまつてもらいましたら、夜中に主人が目を覚まして「みのるはとまつておるか」と尋ねますので、「ねていますよ」と言いましたら、安心したようでした。

翌日牧師先生に電話でお願い致しましたら礼拝すんですぐ御夫妻お揃いで来て下さいました。主人は丁度その時新聞に目を通しているのを御覧になつて、「先生お元気ですね」とご挨拶なさいました私は主人のお腹がふくれているように思われたので牧師先生に手をおいてお祈りして下さいとお願いしましたら、直ぐ手をお腹の上におかれてお祈りして下さいました。じつと聞いていた主人はお祈りがすむと「アーメン」と、びつくりするような大きな声で言いました。これが此の世の最後のことばになろうとは誰も知りませんでした。

牧師先生も主人が普通の時と変らないものですから、安心して帰えられました。長女も来ておりましたが安心して帰えりました。長男もこのぶんなら大丈夫と言つて会社へ出掛る時「お父さん行つてきます」と言つたら「うん」とうなずきました。

長男がまだ会社に行きつかぬ頃急に異変が起り息づかいが烈しくなりましたので、看護婦さんに知らせましたらすぐ医師が診察に来られました。呼吸はせまつて

来ましたが苦しい様子はありませんで自然に自然に丁度火の消えて行くようにして息が止まり医師が「御臨終です」とおつしやいました。

臨終と思えない程安らかでまるで寝顔を見ているようで衰えもなく美しい顔でしたキリスト者の臨終には度々会いましたが、神様のお言葉通り信する者は皆うるわしくて丁度ステパノの臨終の時「主イエスよわたしの霊をお受け下さい」と言つているようで、こう言つて彼は眠りについた。と聖書に書かれているように、まるで眠つているようで呼べば目を開くのではないかと思われました。ですから死んだことは認めても、感謝とよろこびばかりで涙は出ませんでした。私は大きな希望が与えられました。主イエス様の御愛を思い、主人の信仰を受け継いで行く決心を新に致しました。東京にいる嫁も飛行機で馳けつけて臨終の間に合いました。

長男夫婦のために四十年間祈り続けて参りました。今は夫婦共洗礼を受け転勤先の教会で信仰に励げむようになり主人もいつも主に感謝を捧げておりました。聞かれない祈りはないと思いました。主は誠に真実なお方でございました。

私も主人に対して出来る限りを尽して参りました。食事も病院の食事は口に会いませんので、主人の好物を買つて来て何でも食べさせました。思い残すことは何もありません。　その上主のあわれみによつて何の苦しみもなく主の在ます天国に参りましたので主人はほんとに幸せ者だと只感謝でございます。

ガンの末期は耐えられぬ程の苦痛で何本も注射を打つということを聞いていましたが三年半の入院中一度も痛いとか、かゆい等と言つたことがありませんので、私もさすつたこともないので医者も不思議がつて、学術研究の為解剖させて下さいませんかと、おつしやつたので人の為になることでしたらどうぞと申し上げましたら、死体が硬直しないうちにと、すぐ解剖室に入れ内臓を全部取出したそうです。私は立会いませんでしたが娘と法晴さんの奥さんが立会いました。内臓を全部取り出してあるので長くもてるのだそうで霊安室に安置され花輪を飾つて、親族等との最後のお別れを致しました。

その後内臓の解剖の結果の報告を聞きましたら、不思議なことに入院当時よりガンは拡らず又転移もしていない事ガンで死んだのではなく老衰で八十二才の天

寿を完うしたことがわかりました。
神様はガンの細胞をおさえて、拡がることを許し給わなかつたのです。その上にお恵下さつたことは死に至るまで三度三度の事が出来たことも医学では考えられぬことだそうで胃の入口はガンは巻かれているのにかゝわらず食物の通る管は決してつぶれていなかつたちくわのように穴がつぶれていませんので管から栄養をどんどん送り込むことが出来たことでした。神様はどんなことでもお出来になります。信じて祈ればこのような奇蹟を以つて答えて下さり、眠るが如くにして天国に移されたのでございます。　私の家は代々神官の家で祖父は神主をしておりましたので、親族の人等は葬儀は当然神道でやるのが当り前と言うし、私たちはキリスト教でと頼つていますので長い時間もめましたが、主人のタンスの中から四十三年に書いた遺言状が二通出てきました。一通は息子に一通は牧師当てにどちらもキリスト教で葬儀してほしいという意味のことが書いてありましたので、一誰も異議なく遺言通りキリストの教会で葬儀は行われ、最後の最後まで思う所願う所に勝つて最善をなして下さいました。
主人についてのお話しはまだまだ沢山ありますが、長くなりますので今日はこれまでにして続きは次回にさせていただきます。

口述終り

四十八年二月十四日

後　記

「わたしは戦いを立派に戦い抜き走るべき行程を走りつくし信仰を守りとおした。今や義の冠がわたしを待つているばかりである」　（テモテ・四・七）
吉田稲城先生のことはすでにぶどうの木七号に記載致しましたがそれから間もなく昭和四七年十二月四日正午〇時三五分お召されになりました。
笑顔で迎えて下さつた先生のお顔が目に浮ばれて、あの時が先生とのお別れであつたのか感慨無量でなりません。その朝主の導びきを受けて写真帳携えての報告を、だまつて聞いていらつしやいましたが殊の外お喜こびになられて大きな声で私の為にお祈り下さいました。主が最善をなして下さつたので私も奥様同様何も思い残すことなく、喜こんでいたゞいたことが先生

に対してせめて御恩に報いたように思われて、主にあつてうれしく思いました。

今日は思いがけなく奥様が海老津の集会に出席下さいました。お寒い中まだ御主人亡くなられて日も浅く御忙しい所遠路から足を運んでわざわざお越し下さつた御愛を思つて感激でなりませんでした。東郷町をはなれてはや廿年にもなろうとしている者のために、絶えず覚えてお祈り下さる御愛をひしひしと身に感じ私もそのような愛の人になりたいと思いました。

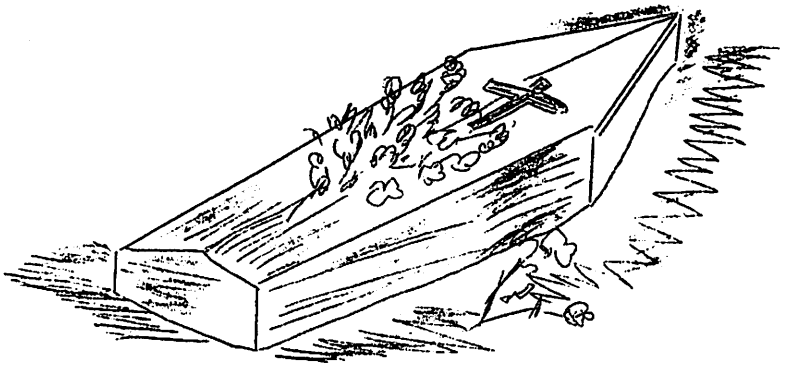
そして先生の御最後のお手紙を大切にしておりますが「あなたがたの救われたのは実に恵みにより信仰によるのである。それはあなたがた自身から出たものではなく神の賜物である　アーメン」

これは私に対する無言の警告だと感じました。神の愛によつて今日ある私は、愛に押出されて、主の導びきに従つて、一歩一歩天国めざして歩みたい。先生も天より弱い私を見守つていらつしやるように思われてなりません。

最後に奥様の御健康と主の豊かな祝福をお祈り申し上げます

四十八年二月十五日

正野員子



うべ我よきゆずりを得たるかな（4）

伊規須　泰子

①〃バプテスマへの決意〃

愚かな幼ない信仰の私も、わずかの間に様々の事を通してだんだん伸びていつた。教会に近ずく事によつて神様を身近に知ることが出来て、少しづつ神様との距離がちぢめられていつた。

神に近ずき奉るは我によきことなり。

9月の秋分の日を中心にして3日間、献堂5周年記念特別聖会がもたれた。私にとつて始めての聖会であり、大いに期待をもつてのぞむ。藤村壮七先生の御用だつた。全部の集会に出席したいと、二日間の休暇をもらつたが休んでいる間に会社（小倉薬品）の課長さんがわざわざ家迄たずねてきて、「会社をやめるのではないかと心配した」と言つた事はおかしかつた。いつもクリスチャンは虫が好かんというように苦虫をかみつぶした気持で私を眺めているが、その中にはがむしやらに対立するかたくなな気持があるのではないだろうか。否定しても否定しきれないものを感じている様子だつた。

かくして聖会は始まつた。まだまだ疑問の時期であれもこれもわからなかつた。しかし〃このほか別に救あることなし〃丈は確信していたからひたすら突き進んでいつた。心にえも言われぬ悦びの湧き出る事は事実だつた。夜の集会前は路傍伝道をした。高木・福岡橋井・山下・内宮・伊規須・それに兄俊郎・太田恵子さん・私・といつたメンバーで、大太鼓を叩き『さまよう人々立ちかえりて・・・・』『罪の渕におち入りて・・・・』等の讃美歌をうたい、パンフレットを道行く人に配つたり、電源を借りてマイクを引つ張り、お証をしたりした。私も「今こんなによろこんでいるのは、ただこのイエス様を信じたからです・・・・。」とお証したが、今考えるとよく私が、と不思議な力を感じる。もう暮れかかつた道を皆と一緒に感謝し乍ら集会へと道を急ぐ。ふつとふりかえつてあの寂寞感の全く消え去つてしまつている自分を知る。信仰の先輩方をみて、私もはやくあんなになりたいと願つたものだつた。信仰によるとき〃後なる者は先になる〃ごとく恵みに遠慮はいらない。

ー信ずるつて何でしよう？ー

「信ずることはむつかしくない。朝顔の種は黒くて小さい。何もわからないはずなのに、これは紫の花が咲く。これは白、これはピンク、と言えば誰一人疑う人なく種を播く。信仰とはこういうものですよ。」

この世の事は信じていることがたくさんあるのに、神様を信じられないとは悲しい。

エペソ書だつたと思うが、お話の内容は、はつきり覚えていないが、ダブダブの洋服でニコニコ。全くそのお姿丈で人を惹まずにはおかない感じだつた。こうしてイエス様ともつともつと仲良くなつていつた。

この頃教会は若い求道者がふえた頃ではなかつただろうか。こういう聖会を通して横の交りが生れてきた気がする。女としては太田恵子さんが家に訪ねて来て下さり友達になつて下さり嬉しかつた。他は兄を通して、高木・山下・内宮・伊規須といつた方々と交りを持つた。この聖会が終つて誰かの申し出によりバプテスマの式を行うという。バプテスマは何年か前に行なつたきり久しぶりとのこと。私はこの頃、この信仰を生涯つらぬき通したいという決心はあつたが、別にバプテスマを受けたいとも、受けねばとも考えていなかつた。むしろよく理解し、心が整えられてからという気持を持つていたのではなかつただろうか。しかし同じ頃求め始めたのだから友として同期に受けようとすすめられて、じやあ受けようか、この神様から再び離れることはないのだからという位の軽い気持で申し込んだ。しかしだんだんこの気持がさぐられてきた。

ーオマエハバプテスマヲウケルシカクハアルノカーいいや何もないーオマエハイマノママデヨイトオモツテイルノカーとんでもないーカミヲボウトクスルコトニテルゾーほんとだ。こんな罪深い私がどうして洗礼に与ることが出来ようか。内から起るサタンの声に負けそうになり考え込んだ。

「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエスキリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神によりて使徒となれるパウロ」

しかし、集会中に、又特別の集りをもつて、私達は整えられ、はつきりイエスをキリストと言いあらわしバプテスマに臨むことになつた。

② 〃バプテスマを受ける〃

いよいよ当日になつた。いやがうえにも早く眼が覚める。新しい生活を望んで胸がとどろく。一番電車で前田から大蔵まで行く。大蔵から登り坂を歩き河内の途中で道を見つけ藪につかまり乍ら下りていく。思いがけずそこに川の溜りがあつた。まだ明けやらぬ冷んやりとした樹木のたたずまいに囲まれ、みんな黙々ときがえる。一人一人名前をなのり、バプテスマを受ける。イエス様のバプテスマを思い乍ら。昭和二十六年十月二十二日午前六時。こうして八人の友と共に霊と水によつて新しく生れ神の子となつた。もうここから後すざりすることはない。私の生涯かけた信仰生活上にはつきりと一線がひかれ基石がすえられた。

夜、感謝会をすることを約して晴れやかな心を抱き、濡れて重たい衣類をぶらさげて朝の光の中を会社へいそいだ。夕方もう一度現場へ行きたく、早く帰られたのを幸とし、大蔵で電車を下り、川迄行つて祈つた。

わずらわしき世を　しばしのがれ
たそがれしずかに　ひとりいのらん（讃・三一九）

この頃はよく感謝会をした。バプテスマ感謝会、そして毎月のお誕生感謝会等、何かにつけては牧師館で食事をし、一食ごとに恵みを食べて肥つていつた。

③〃誠ちゃんの病気・起業祭伝道〃

私達が教会に行きはじめた頃（昭和二十六年頃）の教会の御家族は、そばからみると、とても大変に感じられた。俊雄さん小学四年、和義さん小学三年、咲子さん小学一年、それに誠ちゃんが生まれてまだ三ヶ月目位だつた。しばらくして誠ちゃんが病気だという事を聞き心配し祈つた。この年の十一月の起業祭に八幡の教会が合同で伝道集会を開いた。その日いそいで会社から帰りまつすぐ教会に寄つた。「夕食まだでしよう、おあがりなさい」と、もろぶたから冷御飯をついで下さり梅干をそえて下さつた。霊の糧をふりかけてあつたからかなんとおいしかつたことか!!誠ちゃんは丁度この頃肺浸潤で命がどの位もつかわからないという危険な時であつた。まつ毛の長いあどけない可愛い顔のこの子の命がもう幾許もないと聞き私の心は祈りも忘れてただおろおろとするばかり、先生御夫妻のおこころのいたみをかんがえるばかりだつた。ところが、この日、中央町の市民広場にもうけられている合同集会の場に出かけようとする私共若い者達を見送りに出られた奥様が誠ちゃんを抱いて、「この子の命は神様に全部お

まかせしました。神様は善にして善をなし給うのですから。」と仰言り、全くゆだねきつた御姿を見せて下さいました。私はその時言い知れぬ驚きを感じ、信仰とはこういうものか、と一枚心の薄紙がはがされた思いがした。この事を考え乍ら合同集会に臨んだ。恥ずかしかつたがパンフレットを配つた。兄はマイクをにぎつて大勢の前でお証をした。救われたよろこびをしみじみと味わい、そのよろこびを他人にわけ与える御用の一端に加えていただいたことをよろこんだ。電車にのらず中央町から歩いて帰つた。先生を囲んで当時の青年達は（今ではいいかげんおじさんおばさん迄中だが）讃美しながら足どりも軽かつた。寒さなんか吹きとんでしまつて心の中に熱いものがよぎつていた。

「でも誠ちゃんが大変ですね。」と誰かが言つた言葉に対して、誠ちゃんの事、一切神に御ゆだねした、献げきつてしまつたと話して下さつた。これだ、これが信仰だ、と私は再び強く胸をうたれた。

起業祭伝道、それはどういう救になつたかはつきりしないけれど、これを思い出す度に誠ちゃんの病気を通して示された先生御夫妻の信仰の態度が、私の信仰に一大影響を与えられたことは確かだつた。

終

「ぶどうの木」訪問取材シリーズ（一）

ー牧師館訪問の巻ー

一、はじゅに

今より我は主なり
我行わば誰かこれを止むることを得んや
（イザヤ四三・十三）

汝はキリスト、生ける神の子なり
・・・我は、この岩の上に教会を立つべし
（マタイ十六・十六〜十八）

神と共に四十年、この歳月は、榎本先生の歩みであると同時に、教会の歴史でもあります。

先生の生い立ち、信仰への道程は、説教の中でもたびたびお聞きしているように、先生を「人々からでもなく、人によつてでもなくイエスキリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによつて立てられた使徒パウロ・・・・」（ガラテヤ一・一）とあるがごとく、ご自身の栄光の器として選び、かつ立て給うた父なる神様の不思議な摂理と導きとを私達に示してくれます。

希望に燃えて科学の道に歩み、キリストを拒んでいた青年を愛をもつて捕え、伝道者として遣わされました。

それから四十年、その間、ただ主の御言にのみ従い、どんな小さなことでも神以外の杖となるべきものはすべて打ち砕き「主は確かに生きておられます」と先生は生活の中で、それを表わしてくださいました。

先生が歩みまた経験された主の恵みと御業とを書き残したいと思い、新しく生れた「ぶどうの木取材班」は、七月のある夕べに、牧師館をお訪ねしました。

外は激しく雨が降りしきつておりました。

しかし、牧師館はにぎやかな取材班の押しかけ訪問で、窓打つ雨音もかき消されがちでした。牧師館でお茶を飲めば飲むほど恵まれる、といわれているとおり、一同大いに恵まれ、これからもたびたび押しかけようと思いました。

過ぎこし方を懐しげに話される先生は、とても若々しく、昔のことを実によく憶えていらつしやるのには、我々若い者も驚きました。

以下は、先生のお話しを取材班でまとめさせていただいたものです。

二、明専入学の頃

それじゃ、学生に入る頃から話しましようかね。僕は度々お話ししているように、日本のまん中にある愛知県　　町の商家の次男坊として生れました。

当時は、同じ兄弟でも長男が優遇されて、次男以下はあまり投資してもらえなかつた。ですから上の学校へ行くのに、商業学校ならやつてやろうというのを無理言つて中学校へ行つたものですから、もうそれでや

めとけというんです。でも私は、中学校は帯に短かしタスキに長しでどうにもならんから、もうひとつ行かしてくれ、できたら高校・大学と行きたいけれどもーと頼んで、それなら専門学校ならやつてやろうということになつたのです。早速規則書を取り寄せて調べてみると、ほとんどの専門学校は三年制でしたが、戸畑にある明治専門学校（今の九州工業大学）だけが四年制でした。私は一年でも永く学校へ行きたいと思つて、明専に行くことに決めました。

その時の中学の先生が「君はどうして九州くんだりまで行くのか、なぜ東京へ行かないのか」と言いました。東京の方が近いのですから、同級生のほとんどが東京へ東京へと行くんです。それをわざわざ遠い九州へ行くのですから、私は余程変り者のヘソ曲りだつたのでしようね。（笑い）

試験は大阪で受けました。それにうかつていよいよ入学することになつたのですが、まだあの頃は、九州と言えば日本の西のはて、遠い外国のような、ヒゲもじやもじやの「熊襲」の子孫が住んでいる（笑い）ぐらいに考えていたのですから・・・・・。それが下関まで来て（当時はまだ関門トンネルがなかつたので）連絡船を待つていましたら、目の前に山が見えていて煙突が何本も見えていました。けれどもまさかこれが九州だとはわかりませんでしたね。連絡船に乗つてわずか五分か十分で門司港に着いたものですからビックリしました。へエー！九州にもこんな都会があるのかア（笑い）そこから汽車に乗つて戸畑駅に着いたのですが、当時の戸畑駅は小さな田舎駅でね、汚ないところでした。見知らぬ土地で、何処をどう行つてよいやらわからず不安な気持でしたが、改札口を出ると、明専の先輩達が荷車を引いて「新入生歓迎」とのぼりを立てゝ待ちかまえているんです。それでそこへ行つてこうゆう者ですというと、「いやあーようきた」といつて早速荷物を車力に乗せて寮まで運んでくれたのです。その時のうれしさつたらね、見ず知らずの所で、そのように兄弟のように扱かつてくれるのですから、それもトラックでバアーと運ぶのではなく、自分達が車力を引つぱり、汗水流して運んでくれるというのがね、とつてもうれしく、良い所へ来たなあつて思いましたね。

当時の戸畑は今みたいに大きくはなく、ちつぽけな町でね、明専の周辺は大根畑や蓮田がずうつと続いていて、近くの松林で本読んだり、兎狩りをやつたもんです。また、今の戸畑病院のところが昔は、十字路池といつて大きな池があつてね、そこでカヌー遊びもしましたよ。

学校の前に「福亭」という食堂が一軒あつてよく出入したもんです。店の主人とおばさんがよい人でね、お金のない時でも心よくつけで食べさせてもらつていました。家からの送金がある頃、おじさんが学校の門の所に集金に来ていました。

それでまあ、大きな夢を画いて明専に入つたわけです。この前、河本信生さんが「先生、明専という学校はいゝ学校だつたのですなあ！」というものですから「どうしてですか」と聞くと、日経新聞か何かに東洋レーヨンの会長をしている田代さんという人が自伝を書いてあつたのですね。この人は明専の才一期生なんです。それでその自伝の中で明専のことが出ていたわけです。確かに私達がいた時までは本当に良い学校でしたね。

というのは、この学校を創立した安川電機の安川さんが、東大総長の山川さんに頼んで東大の優秀な人材を集めて教授陣を充実してくださつたから、期待にたがわず良い学校でしたね。

私がこの学校に入つたということは、今になつて考えると、決して偶然なことではなく、また、私が選んで来たのでもなく、背後に神様の不思議な摂理があつたと思います。

三、一言の祈り

二年の冬だつたと思います。風邪を引いて中耳炎をやつちやいました。それで小倉の堺町にある曾我耳鼻科（今でもあるそうですが）に一か月ほど入院しました。何しろ当時はペニシリンもありませんので、絶対安静して氷で冷やす以外にないのです。それでもう試験が間近かに迫るので気が気ではありません。看護婦さんに「帰りたい」というと「あんた、死にたけりゃ帰えんなさい！」と言われましてね。

「そんなこと言うて・・・死にやせんでしょう」

「だつてあんた、去年、あんたと同じ学生さんが中耳

炎がもとで、脳膜炎を併発してここで死んだんだよ。あんた、死にたけりゃ勝手に帰えりなさい！」

こんなに言われたんじゃ、死ぬのは恐いんだし、仕方なくじつと寝て、天井の節穴を数える毎日でした。

寝ている時に、普断だつたら心臓の鼓動は聞えませんけれども、鼓膜の内側に濃が溜ると、自分の心臓のトクトク……という音が絶え間なく響くんです。気持の悪いものですね。

その時に、死というものを考えました。

私と同じ年代の学生が同じ病気で一年前に死んだ・・・・だつたら、自分も死ぬかもしれない。いや私は死なない！と言いたいのだけれども、押し帰えすだけの足場がありません。だから、あわてちやつたわけです。死んだらどうしようか・・・・そう考えたら望みがありません。何をしても死んだら何にもならない・・・・勉強したつてつまらんじやないか。それじや今度病気が治つたら勉強をやめよう！・・・・・・

ところがもし死ななかつたらどうする・・・・・？そうなると勉強していないと生活のことが心配になる・・・・。こうして生きるか死ぬかの中間にぶらさがつているという宙ぶらりんの状態というものは、本当につらいもんだなとその時思いました。

それで死という問題が私の心に大きな不安を与えました。だから何やつても希望がないんです。何かやつていてもふつともし死んだらお終いだ、なんて考えちやう。それじや何もやらなくて満足があるかというと、やつぱり不安なのです。そうゆう不安が私をかりたてて、人間の限界というものを感じて、これは何か偉大なものにすがらなければ私は立つてゆけないのだなあ、とおぼろげながらわかつてきました。

その頃進められていた運動に後藤せいこうという人が中心となつてやつている「希望社運動」というのがありました。これは、難しい理屈は言わないで、毎日生活の中で物事を明るく明るく考えてゆこうというものなんです。今考えると普通のクリスチャンなら誰れでも考えることを美しい言葉で言つているだけなのですけれども、その時の私にとつては、これこそ新しい生き方と思つて、学生の中でこの運動を進めているグループに入つて一生懸命やつたわけです。

この時に、例の西原中将がこの希望社運動の一方の

旗頭としてやつていたのですが、この人が小倉の師範学校に来たので、明専のグループと一緒に話しを聞きに行つた時に、中将閣下が「やあ！榎本君よう来たなあ」と握手してくれて私を感激させたのは、この当時のことなのです。

そうこうしているうちに、人間中心の運動というものは、やはり限界があつて、だんだん運動が行きづまつてきました。

明専には、この他に常信会といつて仏教の会もありました。これは数学の教授が真宗の僧籍にありまして、春秋二回真宗の坊さんを招いて講演会をやるので、これにも入つてみましたが、どうしてもついてゆけないんです。

そうして悩んでいる内に（もう三年になつていたと思います）よくお話しする奥貢教授が、理論化学を教えるために赴任して来られました。そしてその教授に習うようになつたのですが、その当時、私は化学の委員をやつていまして、奥教授が委員長となられたため、しよつちゆう、何じやかんじやでお話しする機会がありました。いつもニコニコしていて、明るく、それでいて真地目で、決つして先生ぶらないし、非常に好感が持てるのです。いつたいこの先生はどうゆう考え方をもつているのだろうと好気心をいだいていました。自分はうらやましくて先生のようにニコニコしておりたいのだけれども、それもできないし、それで負け惜しみに「男がニコニコするなんて女の腐つたようだ。それに比べると僕は哲学者のような顔だ。」（笑い）なんて言つていました。後でその教授がクリスチャンだということを知りました。

その年の正月休みの時、郷里に帰えらないで寮に残つておりましたら、教授が栗ぜんざいをご馳走するから来たまえと、招いてくださつたので、数人で押しかけてゆきました。そのうちに話しが信仰のことになつたので、私も一生懸命でしたから、食つてかかつたわけです。その間、教授はニコニコしながらキリスト教についていろいろと話してくれました。けれどもその当時の国粋主義の教育を受けてきた私は「日本には八百万（やおよろず）の神様がいるんだから、わざわざ外国の宗教を輸入して信じなくてもよろしい」と考えて迷論をはいたわけです。すると教授は「榎本君、君

はまだ本当の神様がわかつていない。だから君が真の神様を知ることができるようお祈りしてあげよう」と言つてくれましたので、私もそう思つて　ークリスチャンになりたいとは思わないけれども、本当に神様という方がいるならそれを知りたいと思つたのです。

教授は、敬虔に頭をたれて祈つてくれました。

「神様、榎本兄弟はまだあなたを知りません。どうかあなたを知ることができるように、また、あなたを神として敬うことができる人と変えてください。イエスキリストの御名によつてお願いします。アーメン」と敬虔に祈つてくださいました。

私はアーメンという言葉は、胸クソが悪くてムカムカしてくるので言いませんでしたが、「そうあれかし」と心の中で言いました。

今思えば、その一言の祈りに答えられて、私がこうして救われたのではないかと思うのです。本当に、一言の祈り、敬虔に神様を敬う人が祈る一言の祈りに神様はどんなことでもして応えてくださいます。

その後、神様のことを知りたいと思つて、こつそり集会に行つたこともあります。

そうこうしている内に、三年生の終り頃、西南女学院にお勤めの佐藤さんという方と知り合いになりました。その方のお子さんが明治学園に行つていましたが、私が散歩をしていた時に、学校帰えりの小学生が、細い身体に大きなランドセルをしよつているのが可哀想で、家まで送つて行つたのです。西南のすぐ下の家で、家に着くと子供が大きな声で「お母ちやん！お兄ちやんを連れてきたよ。」（笑い）というもんですから、帰えるわけにもゆかず、すすめられるまま、しばらくの時をすごしました。これが後に、しばらく下宿させてもらつた佐藤さんというクリスチャンのお宅でした。ここのご家庭というのが今まで私が経験した家庭と違つて、何だか明るくて暖かい空気がするのです。これを機会にたびたび遊びにゆくようになりました。今から考えると随分迷惑だつたんじやないかと思うのですけれども・・・・・・。

ある時、初めて家拝に出してもらいました。みんなで讃美歌歌つて聖書読んでお祈りして、その後でお茶など飲んで色んな話しをするんです。その頃の親子の関係というものは親に口答えしてはいけないと

いうのでしたが、この家は自由活潑に親も言いたいことを言うし、子供も言いたいことを言しね、自由な交わりを持つている。そうゆう家庭というのが珍しいなあと思いました。

そのうちに四年生になつて寮を出なきあならなくなつたので、佐藤さんのお家に下宿したいと無理にお願いしました。下宿している間に、今、臼杵市で歯医者さんをしている息子さんの勉強を見てあげたのですがね。勉強をなかなかしないものですから、苦労したもんです。

その頃、小倉に賀川豊彦や海老名弾正という有名な先生が来たので、よく連れていつてもらつたのですが、いつこう話しがわからないんです。というのは、今自分の持つている人生の問題については何も答えてくれない。神学的な話しはするけれども、私とは関係がない。これじゃだめだと思いました。

四、真の福音

ある時、奥貫教授から「君、教会へ行つてみないか」と誘われました。

「僕は教会へ行つても救われないから、だめです。」

「どうしてかね。君はいつたいどうゆう教会へ行つたの？」

それで私は、今までのことをお話しすると、

「そりゃ君、君の行つたところは、キリスト教の教えであつてイエスキリストの福音じゃないんだ。まあ一度私の行つている集会へ来てごらん。」

私は、キリスト教にも本物とニセ物があるのかなと思いましたが、行きたくもあり、行きたくもなしで、なんとなく口実作つて断わつていました。しかし、とうとう断わる口実がなくなつて連れてゆかれたのが、高見町の八幡製鉄所社宅の城さんの家庭集会でした。

座敷に上つて見ると、座布団がコの字型に敷いてあつて、皆さんすでにお揃いでした。

そして、前話した佐藤さんもそこに来ていたのですね。

教授が「榎本君です。」と紹介してくれました。

するとみんな親しそうに「あゝあなたが榎本さんですか、あなたのことをみんなで祈つでいましたよ。」と口々に言うので驚きました。

お話しが始まりましたが、さつぱりわかりません。

けれども何かしら心の中のモヤモヤがスーと晴れたのです。話しはわからないけれども、ここに何かがあるということを感じました。それで帰えるときは、いそいそと帰えつたのです。「これは変つたな」と自分でも思いました。

それからは、次の集会が待ちきれないようにして出席しました。

そのうち、一か月一回の集会では、待ちきれなくなつて「他に集会がないか」と聞いてみると、福岡では毎週あつているとのことでしたので、日曜日の朝六時の汽車に乗つて出かけるようになりました。朝九時からの日曜学校に出て、十時からの礼拝、午後二時からのリバイバル祈禱会、それが終るのが四時。ですから一日つぶれますけれども、欠さず毎週毎週行きました。

五、初めてのクリスマス

昭和六年三月、学校を卒業しました。

けれども当時は不景気で就職口がなく、そのまゝ研究室に残つて、アルミニュウムと石炭液化の研究を続けていました。

その年の暮近く、クリスマスが間近くなつたとき、牧師先生から「クリスマスに出てみないか」と誘われました。まだクリスマスが何やらわからず、サンタクロースのプレゼントとか、七面鳥の丸焼きが食べられるぐらいの知識しかなかつたのですからね。

礼拝の午後、日曜学校のクリスマス祝会があり、私も幕張りなど手伝いました。その翌日の夜に、感謝会があつたのですが、その席に一人のレプラ（らい病）の人が来ていました。その人が立つてお証しするには、

「自分はレプラにかかつたときは世を呪い、親を呪つてきました。けれども今は、レプラ様々です。なぜなら、このレプラになつたことによつてこんなすばらしいイエス様を知つたのですから。そのうえ、神様の子供としていただくなんて、こんな感謝はありません。」

そしてもう、喜こびにあふれて、指が溶けてしまつたような手をたたいて「天に宝、積める者は・・・」と讃美歌五一三番を歌つている姿を見たとき、心打たれるとともに自分が恥かしくなりました。あんな体で、あんなひどい病気をしている人が、あんなに喜こんで

生活をしているのに、四肢五体健康な自分には感謝もなければ、喜こびもない。そのうえに、あいつがけしからん、こいつがけしからんと不足ばかり言つている。こうゆう自分の生活というものが、いかに惨めであるかということを、いやというほど思い知らされました。

そこに集つている人達も、決つして裕福な人達ばかりとは思われません。けれども、そこには何となく暖かい、なごやかな、そして平和な雰囲気なのです。この世の中にもこんな暖かい所があるのだろうか、これをだんだん広げてゆけば、日本中がどんなに明るくなるかわからないと思いました。

私は初めて、キリストの生きた福音を目で見せられたような気がしました。

六、救いと献身

クリスマスも終つたので、帰えろうとすると、牧師先生から呼び止められ「もうすぐ新年聖会があるから残つてゆきなさい。どうせ学校は休みだろうから。」「はい。」とわけで、教会の前に学生下宿があつたので、学生が帰郷して空いている部屋を貸してもらい、そこに泊つて聖会に出ることにしました。その時に、よく私が説教の中で言うように、ネコが屋根の上で日当ぼつこしながら寝そべつているのを見て、どうしてネコに生れなかつたのだろうか、なまじつか万物の霊長として生れたばつかりに、生活の問題、失業の問題などいやなことばかり、それなのに、ネコの世界は実に穏やかなのです。のんびり寝ている姿を見てうらやましくてたまらなかつたのですね。

そうゆうことがあつて、十二月三十一日に除夜会をやつて感謝会をして、翌日元旦からの新年礼拝に出ました。当時は朝、昼、晩と一日三回、それが五日までありました。

回が進むにつれて、だんだん恵まれてきてよかつたのですが、鋭い神様の光に照されると苦しくなつて、とてもいたたまれなくなつてきました。そこで二日目の朝帰ろうと思い、大急ぎで荷物をまとめ、先生に「大事な実験を忘れてましたので、ちよつと帰えつてきます。」と言つたところが「バカア！聖会の途中で帰る奴があるかあ！」と怒られちやつてね、それでまた荷物を出して聖会に出直したわけです。ところが次

の二時の集会で「主はわれらのために命を捨てたまえり、これによりて愛ということを知りたり・・・・」（Ⅰヨハネ三・一六）あそこの御言葉で、神の一人子が人の子となつたばかりでなく、私達の罪のため死んで下さつた。しかもその罪が何であるかということをいやというほど示され、その罪を許すために神の子が命を捨てて下さつた。しかも、ただ単に命を捨てて下さつたのではなくて、十字架の上でなぶり殺され。私達が当然受けるべき刑罰を代つて受けて下さつた。

その話しを聞いている間に、私の目の前に血のしたたる十字架が、今度は血が、ギラギラと光輝く黄金の十字架に変つてきました。

はるか向うに見えていた十字架が目の前にぐうつと立ちふさがり、十字架を通して神様の愛がさし迫つてきたのです。

私は申し訳けなくて、申し訳けなくて、そんなに愛して下さつたイエス様を拒んで、拒みつづけていた自分は、何と情けなくて、かたくなだろうと思いました。

もう、じつとしておられず、いたたまれなくなつてしまい、目も鼻も涙でクシャクシャになつて、そこに泣き伏してお祈りしました。

その時、神様の前に、『こんなに愛して下さり、自分みたいな者に目を留め、命を捨てて愛して下さつたかたのためなら自分の生涯はどんな苦しみを受けてもかまわない、このかたの前に命を捨てるのなら本望だ』そう決心を神様の前にしました。

神様の愛に迫られて、当然、罪のために死ぬべきところを生かされているのだから、これから先は主の愛に応える生涯を送らせていただきたい ― これが私の献身の決断の時でした。

それから後の集会は、心砕けてへりくだつたものですから、もう神様の恵みはあふるるように注がれて、恵まれつぱなしでした。

聖会が終ると、先生に献身の気持をお話しすると、「それではどこか良い神学校をお世話しましょう。」と言つてくれました。私は「お願いします」とは言いましたが、神学校へ行く気持はなかつたのです。

この福音は、学問ではない、知識ではない、実際に、エリシャがエリヤにつき従つて、二の分を受けたように、私もこの先生の内にある聖霊によつて訓練を受け

たい。柘植先生はすでに昇天しておられませんでしたが、柘植先生の教育方針というのが、言で教えるのではなく実際の生活の中で学び取らせるというものでした。私もそれがいいと思つてましたから、「あゝそうですか、よろしくお願いします」と言うといて、下宿に帰えると早速バタバタと荷物を整理して、研究室には退職願いを出しました。そして荷物を行李につめ込んで送り出し、下宿を引き払つて牧師先生の所へそのまゝ行つたのです。

「献身してまいりました。よろしくお願いします。」

そう言うたら、先生、目をパチクリさせてね。（笑い）

「僕は、そんな器じゃない・・・・・君をうちに献身させることはできん」と言うのです。

「私は先生に献身したんじゃない、神様に献身したのです。神様が私を訓練してくださいますから私はおいていただきます。」

今考えると私も随分強引だつたなと思いますが、私は私なりに、先生は教育できなくても、神様は先生を通して私を教育なさることができなさると信仰をもつていますというたのです。そう言われたら先生もことわるわけにもゆかなかつたんでしようね。

それから、私の献身の生涯が始つたわけです。

続く

ケンちゃん

正野員子

昭和四十三年七月廿四日午前〇時三分、待望の初孫誕生す。陣痛より出産まで丸二日かゝつた。母親の産みの苦しみもさることながら、赤ちゃんも世に飛び出ろうと苦斗したに違いない。体重三一〇〇瓦身丈は知らないが標準だろう。産後の肥立も順調で赤ちゃんも元気な声で泣いた。殆どねむるばかりである。

同じ分娩室にいらつしやつた徳丸さんという方は、難産のため帝王切開して赤ちゃんを取出した時には、窒息していて人工呼吸をほどこしたが助からなかつたそうである。同じ部屋にいた姙婦が、一人は無事に生れ、一人は死んだ。人生の縮図を見るようで厳しゆくなものを感じさせた。胎の実は神の祝福であると聖書にあるように、あわれみに富み給う神様は毎日祈る祈りに耳を傾け祝福して下さつた。

生れた子供の名は初めて父親になつた長男が「謙一」と名づけた。イザヤ書五七章十五節「わたしは高く聖なる所に住みまた心砕けて、へり下る者と共に住み、へり下る者の霊を生かし、砕けたる者の心を生かす」の中から、「へり下る者」になるようにとの願いをこめて、つけたのだそうである。私たちは、ケンちゃんの愛称で呼んでいる。

ケンちゃんが一才と三ヶ月の時、次の子供が産れた。女の子である。名は、「のぞみ」という。聖書に、「いつまでも存続するものに、信仰と、のぞみと、愛」の中からつけられた。

その頃の日記を見ると、

ケン坊やつと歩き初めたと思つたら、のぞみちゃんが産れ、母親は赤ちゃんに手がかかるので、当分私が預つてお守りすることになつた。

かわいそうに、子供ながらママは赤ちゃんがおるからかまつてもらえないと思つておるのか、さみしくなると、ママを呼ばず「パパア、パパア」と連発しつゝ玄関に何度も行きつ戻りつしている。きつと玄関からパパが帰えることを知つているのでしよう。いぢらしい。泣きべそかくので急いでおやつを与えてごまかす。食べてしまうとまた思い出して泣いた。赤ちゃんの時随分なついていたのにしばらく見ない間にすつかりわ

すれられてパパッ子になつていた。

○月○日

ケンちゃんをおんぶして教会に急ぐ、近頃では重くなつて肩にくい込む、目がチカチカして悪い。いくら目薬さしても治らない。少々疲れている。今日当り連れて帰えつてくれたらと思つていたら、もう一週間頼むねと長男が言つた。致し方なし。

○月○日

「お帰えり」・「おいで」・「ありがと」

ケンちゃんの可愛いゝ口から片言で言えるようになつた、一才十ケ月である。

○月○日

いよいよ梅雨に入つたのであろう、激しい雨の中ぬれつゝ八時十分の国電に乗る。長男が子供連れで日曜学校の御用のため教会に来るので、御用の間守役を仰せつけられたのである。今日は雨のためいつもの公園で遊べないのでお守もしにくい。「パパあパパあ」と探し廻る。「パパあ」とべそかく。「パパお勉強すんだらケンちやんのとこに来るよ」「パパあ」「お勉強」何度か繰り返す内、納得したのか言わなくなつた。同居していないので、急に可愛がつてみてもパパには勝てない。

教会の玄関に四・五段の階段がある。その階段を上つたり下りたり、手を借してやらねば危い、それもすぐあきてしまつて、今度は生徒さんのお靴を見て、「これはー」と指さすので、「これは兄ちゃんの」「あれはー」「お姉ちゃんの」と同じことのくり返し、それもあきると、今度はスリッパを皆引出して遊ぶ自分のスリッパは履かないで大人用を好んで履く、時間は終つているのにパパはいつもおそい。幸いママが来たのでバトンタッチ

○月○日

礼拝後、真宏は青年会に残つた。私はケンちゃん連れてしばらく公園で遊び、枝光にケン坊連れて行く。途中タクシー代を節約して、ケンちゃんを歩かせてみると、よく歩き、よく歌う　夜は私とねた。おしつこもよく知らせてくれるので助かる。家拝の時さんびか四六一番「主我れを愛す」よく覚えていて私たちと一緒に歌つた。

○月○日

金・土・日の三日間、ケンちゃん一家が海老津に来て賑やかなこと。連休を利用して、芝生を植えてもらうことにしたのである。私は孫の守り役。遊ばせているうちに、ケン坊が指をつめて私の所に泣いて来たので、もんでやりフーフー息で吹いたが、何やらわけのわからぬことを言う、私にはさつぱりわからない、台所の方から百合子さんが、「おかあさん。お祈りしてやつて下さい」と言つたので、天のお父さまと祈つてやるとにこにこして、もう治つて走り去つた信仰のよいのに驚いてしまつた。祈ればきかれると信じているのである大人の方が教えられる。

○月○日

久し振りで、長男の家の客となつた。道々百合子さんが私と肩をならべて登りながら、こんなことを語つた。「昨日パパが福岡中央病院に行つてパパの初恋の人を見舞に行きました。」私は内心おだやかならざるものを感じ百合子さんの顔をのぞき込んだ。単々とした別に気にかけていないで安心した。語る所によると、初恋の人は製鉄勤務の方と結婚し姙娠なさつたそうですが、子宮外姙娠のため手術を受けられた。所が病状悪しく卵巣除去なさつた所危篤に陥入り、沢山な輸血をして命は取止めたものゝその輸血の血が悪性であつた為血清肝炎を併発し、もはや医学では治療の道がないそうで、不治の病で寝た切りの気の毒な状態であること、弱り果て、それで福音を語つたが全然受入れなかつた。どうしたらよいでしょうかと言うことであつた。結局、百万人の福音の本を送つて上げるようにしようということになつた。病気する前まで健康で大変幸せにしていられたそうで、人生何が起るかわからないと思つた。キリストを信じることがお出来になられたら、救われるのに残念でならない。この方のために祈つて上げようと思つた。話をしているうちに、はや家に着いた。百合子さんが食事の用意をしながら又言つた。先日ケンちゃんが、腹痛を起し一日に十度も便所に立ち血便が出て伝染病ではないかと心配した事、医者に行こうにも、外はひどい雨風で、自分一人で二人の子供を連れては行かれず、神様に助けていただこうと思つて、一生懸命祈つているうち平安が与えられた事そして祈りが聞かれて神ゆでいやされ私の祈りが

聞かれたことを喜こんでいた。そして祈つていると、ケンちゃんも祈り出すそうでことばになつていないけど、手を合せて祈るのだそうですアーメンだけ大きな声ではつきり言うのですよと言つたので一緒に笑つた。

「若き日に造主エホバを覚えよ」

私等の信仰が孫に受け継がれているのを見ることは幸いです。心のうちで主に感謝した。

○月○日

ケンちゃんに桃太郎の絵本を読んであげた。

「おじいさんが山に柴刈りに行きました」

ケンちゃんが「そうお」と言つてうなづく。

「おばあさんが川に洗濯に行きました」

「そうお」と又言つた。

一句一句くぎりのある所で「そうお」と言う小さな口唇や、格好のよい鼻を見ていると、真宏の小さい時と錯覚起してしまう、たまらぬ程かわいゝ。

○月○日

ケン坊の書いた画がなかなか面白い。オバケのキューちゃんのつもりで書いた絵や、自動車もどうにか形になつている。顔から手が出たり足が出たりしている

が結構顔の中に目もあり口もある。パパが目を細くして書いたであろう保存するつもりか日付が書かれてある。「お母さんこれケンちゃんが書いたの」と誇らしげに見せる親馬鹿もいいところ二才六ヶ月の時である。

○月○日

数は十まで数えるが、まだ物を数える頭はない。

「ケンちゃんのおめゝはいくつある。」と聞くと「二ツ」そしたらお鼻は、「一ッ」

おてゝは、と聞くと面倒くさそうに、「きのう教えて上げたでしょ」。

これには一本参つてしまつた。

○月○日

「神は愛なり」言うてみなさいと言つても言おうとしない。桃上げるから言つてごらん「僕方ももがあるよ」という。食べられるねと聞いてみると「みーんな虫が食べちやつた」と言つた。

○月○日

日曜学校に参加して数ヶ月になる。

寮子先生が、「ケンちゃん、この前の金言覚えていますか」と尋ねられて、私の方がドキンとした。どても

お母さんから習つてはいまいと思つたからである。そうすると立ち上つて、「カミニシタガイナサイ」と言つた私は思わず拍手を送つて、えらいえらいと言つて頭を何度も何度もなでゝやつた。

○月○日

ケンちゃんは果物が大好物で自分の分は早く食べてしまうと、妹ののぞみちゃんに、「仲良くしましようね」と言つて一寸抱いて、半分にいちゃんに頂戴と言つてわけるのだそうです。私が見ていると僕強いよと言つて、のぞみちゃんを抱くというより体格のよいのぞみちゃんが、しがみついてぶらさがつているのであつて、やつとこさ、細い体でがんばつているのである。

○月○日

うちの庭にできた見事ないちゞく、五個教会に持つて行つた。そのうち一つをケンちゃんに上げた。おいしかつたとみえて「又頂戴」と言つたので残りの四つを指差して、「一つはお父さん、これはお母さん、これはのぞみちゃん、残りの一つはケンちゃんで、もうないでしよ、だから今食べたら、おうちえ帰えつて皆が食べる時、ケンちゃん何にもないよ、どうする？」と言つたら、すかさず「おばあちゃん、いゝことがあるよ、パパとのぞみちゃん半分ずゝわけたらいいでしよそしたら僕たべられるでしよ」誰れも教えもしないのに悪知恵の働くのに感心した。ケンちゃんの満三才の時のことである。

○月○日

日曜の午後久し振りケンちゃんの家に行つた。ゆつくりして積もる話をするつもりで来たのに、ケンちゃんミミやん（のぞみの愛称）はしやいでドタバタ馳け廻る。さては父親を自分一人で占領しようとパパの前で押合いへし合いして、話も何も出来ることではない。やはり兄貴の方が強いので押のけて倒す、片方はころげて泣く、その騒々しい事うんざりしてしまつた。ケン坊は得意げにパパの肩の上に登り上つた所に泣いていたミミやんが起き上ると負けずに登ろうとすると、足でけつた拍子に、頭の重みで頭の方からパパの後に落ちて強く打つたからたまりません。われ鐘のような大声で泣き出した。そして「パパがしたー」「パパがしたー」とわめきながらパパをたゝく、余りにうるさいので私はケン坊をにらみつけて叱つた。

「ケンちゃんが悪い！自分があばれてて落ちたのに、ケンちゃんが一番悪い！」と言うとプイと腹を立てゝ台所で御馳走造つているママの所に飛んで行つた。一寸静まつたと思つたら、すぐ又引かえして来た。そしてこの頃はママのことをおかあさんと言えるようになつていた、「おかあさんがあとで叱つてやるつて」と言つた。すると真宏が立上つて、台所に行つた。何と言つたのか聞えなかつたが、それにしても大人げないしぐさのように思われておかしかつた。今度は台所から百合子さんが出て来て、「ケンちゃん！おとうさんにあやまんなさい！」と言われて、しぶしぶあやまつてけりがついた。

○月○日

真宏が総連で海老津にやつてきた。金曜日であつた。家の中は一度に賑やかになつた。

お土産に一升だきの電子ジャーを持参してきた。集会用にほしいと思つていたのでうれしかつた。

その日は午後より出勤し一泊して翌朝出勤半どんで又海老津に帰えつてきた。

朝出の陽之が夕方帰えつてケンちゃんにウルトラマンを、土産に買つてきたので大喜こび、私は別の部屋で書き物をしているとケンちゃんの泣声が聞えてきた。普通の泣き声ではない。怒りをこめた激しいものでいつまでたつても泣きやみそうにもない。やかましくてやり切れなくなつたので部屋を出て行つてみると、ウルトラマンをしつかり握りそれを指さして何かを訴えているようであるが、わめいているのでさつぱりわからない横で父親はニタリニタリ笑つて落着いたものである「わかんこと言う子はお尻ぶつたらいゝ」私は復立たしくなつたが、真宏は徳川家康式で、泣きやむまで辛抑強く待つている。とうとう泣き疲れてだんだん泣き声もやさしくなつた、皆はだまつて四方からケンちゃんを見つめるので、阿保らしくなつたのかやつと泣きやんだ。泣きやんだところに、おもむろにパパが口をきいた、「ケンちゃんウルトラマンがどうしたのか言つてごらん」そうすると、ケンちゃんが言つた「ミミやんが頭のくびをわるくした」ということがわかつた、百合子さんが笑いながら、「今まで頭の動かない固定したウルトラマンしか持たないので自由に頭が動くのを知らずミミやんが頭を後に廻したのでこわした

と思つたのよ」パパが頭をくりくり廻しながらケンちゃんに説明していた、やつと納得が行き笑顔になつた。そしてパパが言つた。「ケンちゃんも理由なしでは泣くものではない」と

○月○日

聖日礼拝後今晩インドネシヤ宣教師岩井満先生の講演が七時半から開かれるので夕飯をケンちゃんの家で御馳走になつて、出席することにした。その時のことである。私が行くと、孫二人はすごくはしやいだ。妹の方のミミやんが柱に頭をひどくぶつゝけて大声で泣き出した。パパが抱きかゝえて、祈つているうちもうピタリと泣きやんでいた。ケンちゃんも飛んで来て小さな手を合わせてミミやんにぴたり寄りそつた。お父さんがお祈りして上げなさいと言つたら、素直にお祈りしていた。その様子が無邪気で敬けんな姿はわすれられない。日頃いつも、けんかしていてもやはり兄妹だと思つた。三才三ケ月のケンちゃんでした。

○月○日

礼拝は四人掛の椅子で私は前列から三ツ目の椅子の真中にいつも腰かけて牧師の説教聞くのですが、その説教中どこからもぐつて来たのか私が腰掛けている椅子の下からケンちゃんの声がするので下の方をのぞくと私の足の間からニューつと顔を出して「おばあちゃん「よい子」のほん買つてきてね」私はびつくりした。それでも四ツ這になつて白い笑顔が可愛ゆくて、「よしよし」と言つたら笑つて頭を引きこめた。

○月○日

この三月風邪をこじらせて二週間程ねていた、もうすつかり良くなつた頃ケンちゃん一家が見舞に来た。ケンちゃんと庭の芝生をふみながら散歩した。すると「おばあちゃん」「何んね」「おばあちゃんは神様が造つたのよ」誰から教わつたのかうれしかつた、「そうねケンちゃんよく知つてるねえ」「僕もみーんな神様が造つたのよ」得意気に言つた日曜学校ではわるさして聞いていないようでも、耳に入つているのだなあと思つて御用の大切さを思わしめられた。

○月○日

息子たちが小学校に入学する頃は自分の名前の字を覚えていさえすればよかつた。親も字は先生が教えて下さるから私はどの子も教えた記憶はないけれど人並に、

ついて行つた。現代は世は進み幼児教育が盛んになつたのか、又テレビ等の関係であろうか大変かしこくなつている。

けん坊は赤ちゃんの時、母乳はよく呑むが、勤めがあるので夜だけ、肝心のミルクは、なかなか呑まない母親の乳くびの感触を知つているからでしよう。だから背丈だけは延んだが体重が軽くやせていた。大方頭に栄養が行かず覚えが悪いとばかり思つて、心配していたのでしたが、どうにか人並にあるらしく、ひらがながよめるようになつたケンちゃんを見てホッとした。ひらがなが読めるならとハガキを出した。そうしたらおばあちゃんにお手紙を出すと言つて、せがまれて出したらしい何の字か見わけのつかない手紙が来て、おじいちゃんとそれを眺めてよろこんだのでした。

○月○日

ケンちゃん四才三ケ月のぞみちゃんが満三才になつたので保育園に二人揃つて十一月から行くようになつた。

始めは、母親と離れるのでいやがつていたそうですが最近はお友達も出来、物嫌いの多いケンちゃんも保育園から出される食事はよく食べるし、のぞみちゃんの面倒を見たりやさしくいたわるそうで、プラスになつたと喜こんでいる。

この前二台の貸切バスで若松までいも堀につきそつて行つた。ケンちゃん等初めてのことで大喜こび、お母さんから買つてもらつたスコップも曲るほど一生懸命堀つて、大きな袋にいつぱい持つて帰えり楽しい思出になつた。

○月○日

福岡の娘が主人の社内旅行で一人で淋しいからと言つて海老津に里帰りして来た。翌日は八幡の教会で礼拝し、午後はケンちゃんの家に招待された。積もる話は尽きず、昼食だけでなく、夕食も準備していますからと言うことで晩まで楽しく過した。主人は礼拝後、信徒会で大口さんのお家に行かれたので、私達と一緒に来ませんでした。四時過ぎには海老津に帰えつておられるだろうと思つて、電話をかけることにした。公衆電話まで行かねばならなかつた。「電話をかけるとこ何処？」と私が尋ねるとすぐけんちゃんが「僕が教えて上げる」と言つて、真先に靴をはいで私を待つ

ていた。のぞみちゃんもついて来た。先にどんどん走つて行きお店屋の前でとまつて、「おばあちゃんこゝよ」と言つて指差した。店屋に入つて海老津に電話かけたが誰れも出なかつた、まだ帰えつていないらしい。近くの公園でしばらく遊ぶことにした、五時になつたので、もうおじいちゃんが帰えつているだろうと思つてもう一度電話をかけて見たが矢張り帰つていなかつた。もうあきらめてお家に帰ることにした。けんちゃんが、「おじいちゃんまだ帰えつてないの」と聞くので「どうしたのかねえまあだ帰えつていないのよ」と言つたら「そおーお」と言つた。帰えつてみると、ママの造つた御馳走がズラリと並んでいて、私等を皆が待つていた。みんな揃つてお膳を取囲むと、パパが「ケンちゃん食前のお祈りしなさい」と言つた。私は、いつものように型通りのお祈だろうと思つていると、「天のお父さま、おばあちゃんが何べんも電話したけどまだ帰えりません早く帰えるようにお守り下さい。福岡のおばちゃんもきています。おばちゃんもお守り下さいお食事を感謝致しますどうぞ祝福して下さい。イエスさまのみなによつて　アーメン」

、専子が笑いをこらえていたとみえてプーッと吹き出して「まあかわいゝこと」と言つた。

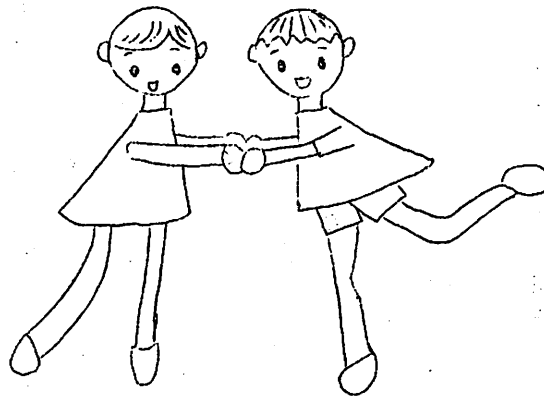
いつの間に誰れからも教えられず自由に祈ることが出来るようになつたのか、感激とかわいさで涙がとまらなかつた。福岡のおばちゃんもハンカチで涙をふいていた。私たちは大変ごちそうになつた。

ケンちゃんとのぞみちゃんがお母さんの加勢して、持運びは皆この二人の役目で、いつもしつけていると見えてとても上手で、のぞみちゃんはやはり女の子です。お膳ぶきんを持つてきて丁寧にふき、野菜くず等のこぼれたものを手元に集めてどうするのかな、と興味深く見ていると、膳の端にかわいいもみじのような手を添えてその手のひらの中に一方の手にふきんで上手に入れるその仕ぐさが母親のすることを以ねているのでしよう、器用な手つきをみて、福岡のおばちゃんも感心して見ていた。

ケンちゃんの四才三ヶ月の時でした。

最近岡山の次男からの便りによれば、順子ちゃんも来年はお姉ちゃんになります。と「痛いよイエスさまアーメン」と祈りましたとか歌も二曲歌えるようにな

りました。と、うれしい便りが来て私達を喜こばしている。
これからの孫の成長が楽しみでならない。
私の日記も孫の記録で埋められることでしよう。
孫たちが健やかで神と人とに愛せられ喜こばれる者となりますように



終り

いよいよ三級だ

野口加代

私は今度、女子の三級に行く、何だか胸がどきどきしている。
今まで二級だつた私は、正直言つて二級からやつとぬけ出せると思つたらうれしかつた。
それは、先生はとつてもよく、話もよくわかる。
しかしその話を聞こうにも、まわりの四年生が私語ばかりしてうるさいので、かんじんの話が聞こえない。
一週間に一回、それも一時間もないのに。私は中間の通谷です、電車で来ます、でも家から電停まで遠いし、また電車で前田まで来るのもだいぶんかかります。だからちこくばかりしています。自分では早く行こうと思うのですがやつぱりだめです。だから話は十分聞けません。
大人の礼拝に出ようと思うけれど、むずかしくて話がよくわかりません。だからねむくなつてしまいます。
又、学校の用事で、午前は教会午後は学校というのが多いのです。

その点三級はゆつくり話も聞けるし、さわがしくもありません。

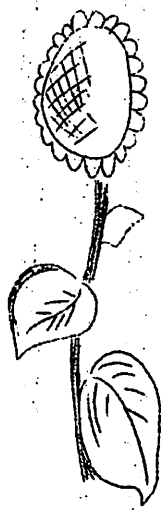
三級は私の好きな歌の練習をしています。そして、イースターや何かの行事などに合唱するそうです。それに調先生がおつしやつていたけど、行事の他に体の不自由な方や、老人ホームなどにも行つて、歌を歌つたりするそうです。私はうれしくてうれしくてたまりません。

それに夏期学校になると、大濠教会の 美 さんや、山本先生といつしよに分級で話が聞けます。

私は早く三級になりたいです。そして姉さんといつしよに讃美歌を歌いたいです。それと、もうちこくはしません。

三級の先生、姉さんよろしくお願いします。

終



自己紹介

小田善昭

昭和十八年十月、八幡区鳴水町に、四人兄弟の三番目として、私の許可なく、ご誕生である。戦争中、食糧がなかつたせいか、足が短かく、横が広い人間で、いまの学生が羨ましいかぎりである。

母が人間のできが悪かつた父を見て、これではいけないと、金光教を信心、もう三十年、せつせと通い続けているのである。両親から何度か、日曜学校へ連れて行かれた。神はどういうお方か教えられた憶えはない。ましてキリスト教は、歴史で学んだ程であるから神なんかは無関心でいた。

ある日、兄が酒で問題を起し、職場のクリスチャンから導かれて門司の教会に行くようになつた。だから何か悪い事をした人がと、俺は行かんでもよろしいと思つていた。

兄の様子が変つて来た。酒も煙草も止めて、優しくなつた。そのうちに兄と一緒に教会の門をくぐつた。黒服を着、メガネをかけ、チョビヒゲを生やした頭の

よさそうな牧師が説教していた。初めて聞く説教は、まんざら分らないでもなかつた。しばらくすると、兄が行つたり、行かなかつたりで私も右へならへをした。又、しばらくすると、こんどは小倉の教会へと足が向いた。前よりは、少し熱が入り夜の集会まで出席する様になつた。が、なんせ時間がかかるので近くにないものかと、年金病院の前の教会へ行つたが、学生ばかり目に映つたから駄目。次はと・・・電車から外を眺めていたら、入口が狭い小さな教会が見えた。ホウ、こんなところに教会が。恐る恐る扉を開け、受付の人から案内された。面白い事に右の席には男、左の席には女と指定席だつた。他の教会と違つて面白い説教をするなあとメガネの牧師をしげしげと見ていた。

これが前田教会の才一印象である。これを書かなくては、私の自己紹介には成り得ないだろうと、己をはぎとるのである。私は人を笑わせる特技をもつ、ドモ君（どもり）である。全国には百万人余り、仲間がおるそうである。友達に酷いドモ君がおる。

ドモ君がドモ君の喋るのを見て笑うのであるから、人が笑うのは当然だ。ドモ君をみていると、かわいそうになる。ドモ君同志は一回の交わりですぐ仲良くなる。同病相あわれむなのかもしれない。

五、六才の頃、百万人の一人の名誉？に選ばれたのである。原因は、はつきりしないらしい。誰かの真似をしたのだろう。二十年間このドモ君に泣かされたのである。小さい頃は、さほど苦痛はなかつた。買物に行かされる。言い難い言葉がある。店の前をウロウロ、とうとう買わないで帰つた。六年生の時、からかわれてか、分団長にさせられた。一年生から六年生が集まつて話し合いである。先生から、これこれしかじかの要領で、いざ声が出るや連発・・・・ゲラゲラ、そくざに首である。年下から笑われ、あわれ悲しき主人公。前から本を読まされる。もう胸はドキドキ、教室から抜け出したい気持である。容赦なく次、しかたなく立ちあがる。才一音がでてこない。皆の視線がいつせいにドモ君に注目、顔が赤くなり油汗が出る。やつとのことで声が出たかと思うとワワ・・・タクシは、どつと笑う。特に女が笑つた。あとが続かない。先生は哀れに思つたのか、「ヨシ」次。休み時間には皆の顔を見ることができなくて、ドモ君、しょんぼり

下を向いている。
駅でキップを買う。後に誰もいないと、なんだか楽であるが並んでいると、ひどくドモ君が現われる。
上級に進むにつれて知恵が働く。質問されると知つていても「ハイ」頭をかいて知りませんで通した。
会社の面接試験で当然のように落ちた。次才に人と話をするのを避ける様になり、これらの影響でか、内気、無口が酷くなつた。そして何度か自殺まで考えた。
そこで勉強するより、と学校を中退し、ドモ君退治を、と考えたのである。
大きく口をあけて発声練習、精神強化等やつた。
又東京へと足を伸ばした。ここは北から南からドモ君が集合していた。あれこれと戦術をかえて戦つたが、住み心地がいいのか、ドモ君は、なかなか降参しない。頭をなんべん下げても無駄だつた。いやな奴を背負い込んだと頭を抱え込むのである。
「主にあつてその偉大な力によつて強くなりなさい」
いつもビクビク、気の弱い私が「神を知つた。」生きる目標、生きがいを与えて下さつた。喜びがあふれ涙があとからあとからとでた。感謝、感謝である。
こうして神は弱い私を強くして下さつた。最近は年をとつたせいもあろうが、人から笑われても、気にすることなく素直にドモ君だと認めるようになつた。
又、人は苦心惨たんしないでスラスラと喋れるのが当然だ。だから、ありがたさが解らないだろうと思う。
ドモ君は違う。上手に言えても、失敗しても一言一言、感謝をもつて話すことが出来るようになつた。
ドモ君に与えられた特権かもしれない。祈りの一つであり、不可能と思い込んでいた結婚。昨年妻を与えられ、もうすぐ親父になろうとしている。
かくしかじかでドモ君の自己紹介なのである。

終り

「犬も食わないなんとやら」

正野真宏

変てこな題をつけたものである。と言つてもイロハかるたではない。犬も食わないものとは、すなわち夫婦ゲンカのことである。

夫婦ゲンカとは、こりあちと隠やかではないぞ。しかもクリスチャンには相しからぬことではないか。

それに、へえ、あのやさしそうな正野さんがねエ！と言われそうである。だがしかし、やさしそうなという外見と本当の中味とは大違い。「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」（サムエル上十六、七）

神様から見られると全くのお手上げで、クリスチャンとしても、夫としても欠かん車（者）、いつそ名前を丸出ダメ男に変えた方が正直でよろしいと思つている。

そうゆう者が、夫婦として今日までなんとかやつてこれたのも、全くもつて神様のあわれみによるものであり、主にあつてお互い許し合つてきたからだと思う。

ところが何様、前述のごとく丸出ダメ男であるから、虫の居所が悪い時、自らを制しきれずに怒るときがある。すなわち夫婦ゲンカである。勿論、今日まで家内に暴力をふるつたことはない。それは私がやさしいからではなく、暴力をふるうほどのことが起らなかつただけのことである。ところがこの前、ゲンコツを食らわせなければ腹の虫がおさまらないことが起きた。

これから事のてん末を書きますから、まあ話しを聞いてくださいな。

いや、事の起りは大したことじゃないんです。あれは確か十二月十日の日曜日だつたと思う。その日は礼拝のあと、河本さん宅で一年の感謝会があつた。私も途中からであつたが出席させてもらつた。皆さんの神様に対する真剣な態度にふれて大変教えられた。

さてその帰えりに、家内がケンちゃんのセーターが買いたいというので、中央町のユニードに寄つた。沢山の品物の中から、あれでもない、これでもないと探し出すのは大変だ。

「これどう？」

「うん、なかなかいいね」

「これは？」
「うんそれもいいね」
もともと私は、品物を見るセンスというものがないので、自分で買物することがない。だから全部家内まかせだ。そうゆう私に「どれにしましょうか」と問われてもわかりつこない。みんなよく見えてくる。安い値段でよりよい品をという欲な考えを満たす品物なんて、そうそうあろうはずがない。それでも一生懸命にさがす奥様方の苦労は並大抵ではない。
一つのセーターを買うのにどれくらい時間がかかつただろうか。その間中、ケンちゃんとのぞみちゃんはいつときもじつとしていない。あつちに行こう、こつちに行こうと私の手を引つぱる。
目ざすは三階のオモチャ売場だ。あそこに上つたら最後、それこそタダですまないので、そこいらをグルグルと歩きまわつてごまかす。
どうやら決つたようだ。赤い地に白のゾウさんの模様が入つてなかなかかわいい。
「それでは、私はお勘定をしてきますから」と家内はレジの方へ行つた。私は、子供達をつれて先に行くからと家内につげて階段をおりた。そして階段から一番近い出口の所で家内を待つたが、なかなか来ない。
「おかしいな、金を払うだけだから、そんなに時間はかからないはずなのに・・・。たとえ、電車通り側の出口に行つても、いなければこつちに来るはずだが。」
気を取り直してまたしばらく待つ、だがまだ来ない。
「いつたいあいつは何をしているのだ。もしかしたら、別な買物に寄つたのかもしれない。それにしても、そのように一言いつてから行けばよいのに・・・・勝手な自由行動をとるとはけしからん！」
そう思うと腹が立つてくる。それにさつきから子供達が、グジグジ言い出した。何か食べたい、早く帰えろうと私の手を引つぱる。あげくのはては泣き出す。ちようど昼寝の時間で、ねむくなつたにちがいない。
「おりこうだから、もう少し待つてね」と、祈るように悟すように言いきかせても、聞いてはもらえない。人通りのはげしい出口の所で、大きな荷物をさげてキョロキョロしているノッポのパパさんと、その足にまつわりつく子供達　どうもいただけた格好ではない。帰える訳にもゆかず、おかしを買いに行くこともでき

ず、かといつてこれ以上待てる状態ではない。身体ここに極まれり。あいつはいつたい何をしているのだ。もう三十分近くも待つたぞ……心の中のウジャウジャは頂点に達した。

ようし、帰えつたら原爆並みのゲンコツをあの高慢な頭に一発ぶちこんでやらねばならぬ。たといそれがため泣き出しても、また家を出るようなことがあつても構わぬ。これは、正義のゲンコツだ。

外は雨が降り出して、ますます状態が悪くなつてきた。もはやこれ以上は待てない。腹を決めて帰えることにして、ケンちやんに「よし帰えるぞ」というと

「ママはどうするの」ときく

「ママは来んから、おいて帰える」というと

「いけんよ、ママ一人になるじやんか」という。

こうなつたらどつちが親だかわからない。かまわずタクシーに乗つた。

さて、家についたが、家内はまだ帰えつていない。するとどこかで我々を探していることになる。早く帰えつたことをチョッピリ後悔した。

しかしそもそもの原因は家内にあるのだから、この際糾弾しておく必要がある。

そうこうしている内に足音がして家内が帰えつてきた。そして玄関に入るなり、

「私、すぐ降りたのに、あんた達どこに行つてたんね。私、随分探したんよ」

（あれ！ちよつと様子が違うわい）

聞けば、彼女は電車通り側の出口へ行つたらしい。そちらとばかり思い込んであちらこちらと探したが見当らない。三階のオモチャ売場かもと、そちらに行つてもいない。では電停ではと思つて行つたが、そこにもいない。そこでまたユニードに引き返して探しまわつたという。家内は家内で頭に来ている。何のことはない、広くもないユニードの中をグルグル廻つて、肝じんの所を見落していたというわけだ。

バカだなあ、と相手の知能程度の低さを責めたものの、私もあの時冷静だつたら店内放送という方法も考えついたはずであつたし、お互いが不完全な行為だつたのだから、一方的に原爆を落とすわけにはゆかなくなつた。かと言つてそれだけであんなみじめな思いにさせられた怒りは溶けない。だから相手にそれを理解させ

ようと必死で言うのだが、相手は相手でいかに苦労したかを必死で話す。一言でよいから「そうね、それはひどかつたわね。ごめんなさい」と言つてくれれば、気は治まるのに、いつこうに言つてはくれない。では自分が言えばよいではないかということになるが、そこが丸出ダメ男たるゆえんで、やせても枯れても一家の主人、頭を下げられるかい、ということになる。

お互いに意地の張り合いである。

ケンちやんが「ママが悪い」と言い出した。

家内が「どうして悪いね」と語気強くやりかえす。

「だつてママ、ケンちやんたちが待てたのに来んやつたやん」

家内はケンちやんが私の方についたのがくやしいのだろう。この言葉が気にくわない。

私は、これはいけない、なんとかしなければと思つた。その時、フッと「我を仰ぎ望め」という声を聞いたように感じた。そうだお祈りするの忘れてた。（本当にダメ男ねエ）

それで家内に「お祈りするからおいで」というとシブシブ来て椅子に座つた。

「さあ、ケンちやんたちも一緒にお祈りしようね。・・・・天のお父様、私達はわずかな行き違いから、腹を立てたり、うらみに思つたりしました・・・・」ここまで祈つたら、家内がクックック・・・・と笑い出した。私が今までと一変して真正直に、まじめに祈つたからだろうか。するとケンちやんが訳もわからずにハハハ・・・・と大声で笑つた。のぞみちやんも「おもしろいね」と言つて笑い出した。

私は続いて祈つた。「お父さま、我を仰ぎ望めとおつしやいます。また、イエスキリストの血すべての罪より我らを潔むとあります。どうぞ今、私達の心の中を潔めてください・・・」

私達クリスチャンにとつて幸いなことは、神様に祈ることができるということだ。祈り終つたとき、私はもうこれでおしまいだと思つた。というのは、世の中では形の上ではおさまつても、後々まで尾を引くことが多いからである。まして丸出ダメ男とダメ子にもし信仰がなかつたら、おそらくベトナム戦争まで進展していつただろう。大火も最初はマッチ一本の小さな炎から始まるではないか。大火になつて相当の被害を出し

てから、誰れかが乗り込んで一応はおさまるが、しこりは取れない。次の何かの事件の時に、また頭をもたげるにちがいない。

幸いなことに私達は神様を仰いで主にあつて許し合うことができる。

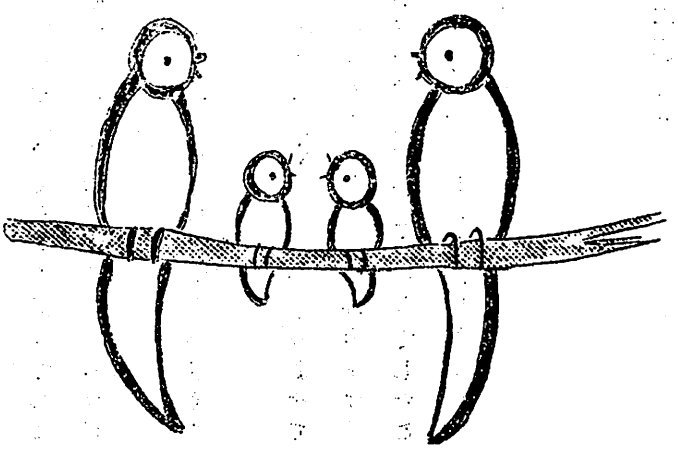
「怒りを遅くする者は、勇士にまさり、自分の心を治める者は、城を攻め取る者にまさる。」（箴十六・三二）とあるが、自分の力で心の中から湧き上る怒りを鎮めることは至難の業である。ましておのが心を治めることなんかとてもできないことだ。しかし私達が神様に信頼したとき、神様は私達の心の中の怒りのトゲを取り去つてくださつたばかりか豊かに許しを与え、感謝を与えてくださつた。

私は「犬も食わないなんとやら」という変てこな題をつけた。夫婦ゲンカは犬も食わない。まして人様も取りあつてはくれない。けれども神様はあわれみ深い方で、うまくもない我々のケンカを全部食べてくれた。これから先も食べてくれるだろう。ありがたいことである。

最後まで話しを聞いてくださつてありがとうございました。いかがでしたか？

え、なに・・・？　落語の種にもならないおそまつの一席、やつぱり読まない方がよかつた、読んでバカ見たつて・・・・・。こりあ、どうも失礼しました。

終



編集後記

ぶどうの木8号が、ようやく実りました。
みなさんからの多くの、すばらしいお証の投稿ありがとうございました。
編集局は、嬉しい悲鳴をあげて編集させていただきました。
皆様の、お手許に届く前に原稿を読ませていただく大きな恵を、神様からいただいております。
編集の不手際で、発行が遅くなりましたことを、お許し下さい。9号も、どしどし御投稿下さいますよう、お祈りいたします。

―終―

一九七三年四月

編集者　安東倫子